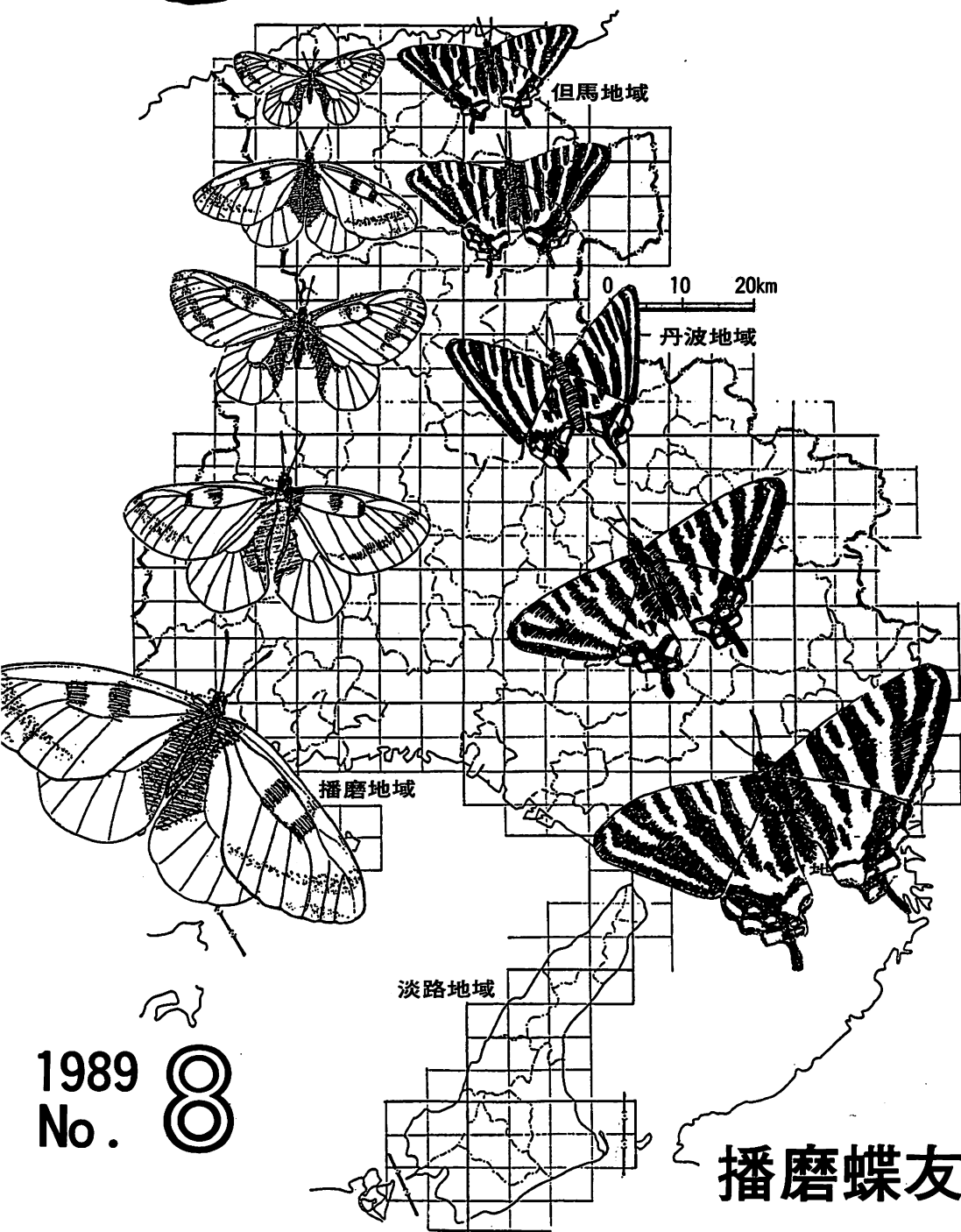


ひろおひ



1989
No.

8

播磨蝶友会

兵庫県産蝶類分布資料(5)

— ギフチョウ・ウスバシロチョウ —

広畑政己・近藤伸一

はじめに

県下におけるギフチョウの研究の草創期は1920年代後半のようで、山本(1967)によると1925年4月20日に六甲山麓赤松城熊笹中で小林賢三(桂助)氏によって発見されたのが最初の記録のようである。その後1928年には山本広一氏が滝野町五峯山で、1930年代には印南郡東志方村(現在の加古川市志方町)、加東郡米田村(社町)、小野市西本町、美裏郡三木町(三木市)で次々と発見され、さらに1940年～50年代にかけて、小野市西脇市、黒田庄町など数多くの産地が見つかった。

それらの集大成が山本広一氏によって発表されたのが今から22年前の1967年である。その頃からは同好者の数も年々増え、モーターリゼーションも相まって、その産地が県南東部の播磨、摂津地域から北部の丹波但馬にかけて数多くの産地があることが明らかになった。それらについては尾崎(1979)に報告されている。

また、ウスバシロチョウについては11年前の山本(1978)で全県の分布をまとめられて以来県下の各同好会誌で分布に関する報告は見られるが、まとまった資料がないため、両種について筆者らの調査の結果と同好諸氏の協力を得て、不完全ながら今後の分布調査の基礎資料として県下全域の状況をまとめてみた次第である。

ここに表した産地以外にも、まだかなりの産地があると思われるが、それらについては関係誌に発表されるか御教示いただければ幸いである。

本稿を草するに当たり、北部の状況についていろいろ御教示いただき快く採集記録を御提供下さった木下賢司氏と北部のウスバシロの記録と南部の両種の状況について御教示いただいた木村三郎氏に御礼申し上げます。また、田辺広躬、小野克己、尾崎勇、前平照雄、浜田静、高柳栄一、永幡嘉之、高嶋明、谷川勝彦、徳岡正己、墨谷健の諸氏にもお世話になった。ここに記してお礼申し上げます。

I ギフチョウ

1 分布の概要

県下のギフチョウが分布している区域は次のように6区域に大別することができる。

(1) 東播磨南部地域

加古川市、小野市、三木市、神戸市西部を中心とする。古くから知られた産地が多いが、近年開発や環境の変化に伴い個体数は少ない。明石市朝霧が県下最南の記録であるが、現在はすでに開発され、絶滅した。

〈採集記録〉

加古川市野尻²⁷城山²⁷中才²⁷別当²⁷上原²石守²
 広尾西²⁷山庄²⁷池寺²⁷宮谷²⁷長楽寺²⁷法華口²⁷
 小野市西本町²来住町²市場町²万勝寺町²脇本町²
 三木市上の丸²大村町宮²福井町²広野²志染御坂²
 別所町這田⁴細目 殿畑 志染中
 吉川町⁴
 加西市古法華
 神戸市雌岡山²神出町²押部谷¹多聞²
 明石市朝霧¹⁰

(2) 東播磨北部地域

西脇市、中町、黒田庄町、八千代町、滝野町を中心とした区域で、10年前まではどの地域もかなりの個体がみられたが、この地域も近年激減した。

〈採集記録〉

滝野町上滝野²下滝野²五峯山¹
 西脇市寺山²武鳥山²八日山²金城山²市原町²堀町²
 鹿野町²板波町²岡崎町²野村町²津万井²
 高島町⁵比延¹⁰塚口¹⁰八坂、出合、小坂町³⁶
 合山、谷町、明楽寺
 中町 奥中、高岸、安坂、栂屋、徳畑、安田¹⁰中村¹⁰
 黒田庄町門柳、大笹新田
 八千代町仕手原、柳山寺、普光寺、上芥町、遠坂、
 横屋
 社町 朝光寺付近²畑
 東条町 長谷、黒谷

(3) 阪神北摂地域

三田市、宝塚市、神戸市北部、川西市にまたがる区域で、この地域も過去にはかなりの個体数がみられたが、1970年代の開発ラッシュや採集者の乱獲で激減し絶滅した所も多い。

〈採集記録〉

神戸市六甲山麓² 干刈水源池¹⁰
 宝塚市切畑² 境野² 大原野² 玉瀬³ 武田尾¹⁰
 三田市仕手原³ 春霞園² 大原² 乙原² 上野³ 虫尾、梅
 ノ木、砥石川⁴⁰ 桜ヶ丘⁴³
 川西市多田¹ 妙見山⁵

(4) 丹波地域

篠山町、氷上町、春日町、柏原町、丹南町、西紀町
 と続く多紀連山周辺地域であるが、記録はすべて古い
 もので、最近の状況は不明である。

〈採集記録〉

氷上町城山² 犬岡山²
 春日町野村² 三尾山² 平松¹⁰
 柏原町鏡ヶ坂² 金山² 新井² 萱田² 上小倉¹⁰ 下小倉¹⁰
 篠山町盃ヶ岳² 三嶽² 西ヶ嶽² 小金ヶ嶽²
 丹南町文保寺² 奥谷²
 西紀町上板井²
 今田町²

(5) 市川上流地域

市川最上流のごく狭い範囲に棲息する。

〈採集記録〉

生野町柘原²
 大河内町川上¹⁰

(6) 但馬地域

豊岡市、城崎郡、出石郡、美方郡の北但馬一円と養
 父郡、朝来郡の南但馬の限られた地域に分布する。個
 体数は比較的多い。浜坂町観音山が県下の北限となる。

なお当地ではすでに絶滅したとの記載もあるが、本
 年産卵を確認している。

〈採集記録〉

豊岡市妙楽寺² 高屋(金山)⁷ 愛宕山⁷ 三開山⁷ 上鉢
 山⁷ 大門山 山本 下鶴井 福成寺 倉有 宮井⁷
 神武山² 上佐野⁷ 市谷⁷ 日撫⁷ 中ノ谷⁷ 上町⁹
 出石町八坂² 平田² 有子山² 桐野⁷ 城山⁷ 奥小野⁷ 尾
 崎⁷ 鳥居⁷ 法沢山 袴峡
 但東町奥矢根⁴ 高竜寺岳⁷
 城崎町来日岳⁸ 結⁹
 竹野町床瀬⁷ 小城⁷
 日高町進美寺山² 稲葉⁷ 藤井⁷ 山宮⁷ 岩中(城山) 枋
 本 蘇父岳² 阿瀬溪谷
 香住町三川山山頂⁷ 三川⁷ 余部連台山

村岡町静川山 兎和野³⁸ 小城³⁸ 和佐父³⁸

温泉町上山高原⁷ 宮脇⁷ 海上³⁸ 扇ノ山 ショウブ池¹² 小
 ズッコ小屋¹² 後山³⁸ 越坂³⁸ 霧ヶ滝 檜尾³⁸ 春来³⁸
 蒲生峠³⁸

浜坂町観音山² 清富 久斗山³⁸

八鹿町寄宮⁷ 妙見山²

大屋町杉ヶ沢²

養父町万福寺

和田山町糸井 夜久高原¹ 竹田

朝来町奥田路¹⁰

(7) その他の記録について

過去に1度の採集記録があり、その後再捕獲されず
 また付近に産地もないので、棲息地ではないと思われ
 るものや、食草のヒメヤンアオイが生育し、本種が世
 代をくり返しているところもあるようである。

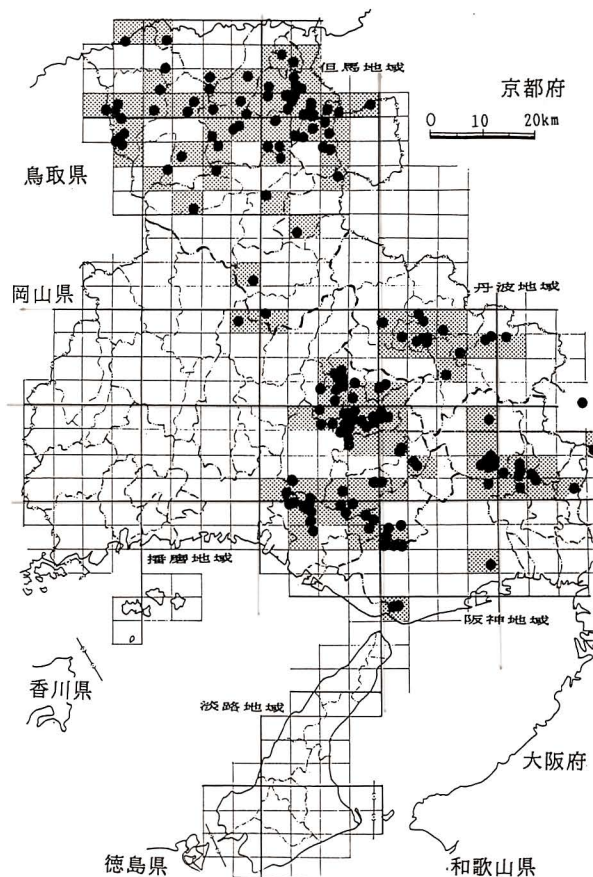


図1 ギフチョウ分布図

〈採集記録〉

千種村三宝山	溝口 修 2
香寺町谷山 10-IV-1964	有方久幸 2
相生市矢野 1960	八木典也 2
姫路市豊富町神谷 1988	松本節夫 49
揖保川町馬場 1985	高柳栄一

2 分布の変遷

1) 開発による絶滅

神戸市の六甲山麓は県下で最初に発見された場所であるが開発の波を一番早くうけ、1933年頃には造成工事のため棲息地は姿を消した。

神戸市垂水区多聞と明石市朝霧町は県下最南の棲息地であったが当地も宅地造成のため絶滅した。1958年尾崎勇氏が住宅地の中で採集したのが最後である。

渡辺(1979)によると宝塚市西谷地区で1968年に確認した10カ所の棲息地のうち10年後の1978年には4カ所が開発により破壊され、その他の場所も環境の変化により個体数が減じ、棲息が確認出来たのは3カ所であったという。同様の現象は特に県南部の各地に見られる。

2) 西脇市とその周辺における個体数の激減について
県下における本種の産地の中でも加古川流域は産地数、個体数の多さでは群をぬいており、とりわけその中でも西脇市はその最たることで知られている。

これらの産地ではスギ、ヒノキの植林の中やクリ林、アカマツ、コナラの林床にヒメカンアオイが見られ、そこが本種の発生地となっている。

筆者らは1977年ごろから西脇市を中心にその周辺の中町、黒田庄町、八千代町などによく出かけたが、当時は個体数も多く、いたるところで本種を見ることができた。しかし、個体数が多かったのは1983年ごろまでで、その後は次第に少なくなり、多産地であった西脇市の八坂町でも1985年にはやっと数頭見られる程度になり現在ではその姿すら見ることが困難な状態になっている。これは周辺の地域でも同じ状況である。

少なくなっている要因としては乱獲もその一つとして上げられるが、それ以上に環境の変化が進んでいるということが言える。

多産地であった八坂に於てはヒノキの植林の間に食草が多く見られたが、現在は木が大きく成長し、ヒメカンアオイは絶えてなくなっている。また、まばらに生えていたマツ、ヒノキ、スギの林床にはスミレやシヨウジョウバカマなどが木漏れ日を受けながら咲き、

食草も見られ、花には本種が吸蜜に訪れていた。これが1980年代前半までの状況であったが、木の成長と共に林床には日がさし込まなくなり、食草も吸蜜植物も絶え、それを糧としている本種も同じ運命をたどるといふパターンになっている。

これは八坂だけではなく、中町の奥中、黒田庄門柳が同じ状態である。また、中町高岸では神社のまわりが切り開かれ、生息地が宅地や道路に造成され、昔の面影が全くなくなっているというのが現状である。

写真(1)は1977年頃の西脇市出合の状況である。マツやコナラの雑木林の中や周辺には多くのギフチョウが飛んでいたが、現在は写真(2)のように左側が輔場整備され、山側は伐採されヒノキが植林され、その間を本種が活動している。今はまだ本種も生息しているし、食草も植栽木の間に健在であるが、あと10年もすれば食草が絶え本種もその影響を受けるであろう。このような所が増えれば増える程本種の生活の場が縮められ、個体数の激減に拍車をかけることにもなるのではないだろうか。いずれにせよ乱獲そのものも大きな要因であるが、環境の変化が本種にとって個体群を繁栄存続し得ない一番の問題となっている。



写真1 1977年頃の出合



写真2 現在の出合

3 食草について

県内に分布するウマノスズクサ科の植物のうちギフチョウの食草となり得るカンアオイ属はウスバサイシン、フタバアオイ、ミヤコアオイ、サンインカンアオイ、ナンカイアオイ、ヒメカンアオイの6種である。

他にアツミカンアオイ（淡路、但馬）⁴⁷ ゼニバサイシン（六甲山）⁴⁷ コバノカンアオイ（赤穂郡）⁴⁷ の記録がある。アツミカンアオイは以前サンインカンアオイと同一種とされていたもので但馬のアツミカンアオイはサンインカンアオイであり、淡路のものはナンカイカンアオイと推定される。ゼニバサイシンはヒメカンアオイ節に含まれ、同一種として報告されることもあるが産地から明らかにヒメカンアオイと判断できる。コバノカンアオイについては不明である。

これまでに食草として確認されたものは、ウスバサイシン、ミヤコアオイ、サンインカンアオイ、ヒメカンアオイの4種であるが各種ごとにギフチョウとの関係を整理した。

(1) ウスバサイシン

温泉町扇山、上山高原、村岡町澗川⁴⁷ 養父郡妙見山⁴⁷ 氷ノ山⁴⁷ 生野町魚滝⁴⁷ 栃原¹⁰ 朝来町黒川¹¹ に分布している。

但馬地域のごく一部でギフチョウの食草として確認されている。

扇山付近で谷角、黒井(1987)は1984年3例、1986年3例ウスバサイシンへの産卵を確認し、同時にサンインカンアオイにも産卵を確認している。また前平氏によると、5月上旬頃の扇山はウスバサイシンの葉はすでに開いているが、サンインカンアオイは新芽を出した程度でギフチョウが産卵出来る状態まで成長しているものが少ないため、ウスバサイシンの方に産卵がよくみられ、サンインカンアオイは前年の葉に産卵される傾向が強いそうである。

本年豊岡市内のギフチョウ発生地にウスバサイシンを植栽したところ、付近のサンインカンアオイと同様にウスバサイシンにも数多くの産卵がみられた。現在木下氏と幼虫の追跡調査を行っているところである。

(2) フタバアオイ

多紀町福住⁴⁷ 氷上郡三国岳⁴⁷ 朝来郡段ヶ峰⁴⁷ 佐中⁴⁷ 神崎郡笠形山⁴⁷ 大河内町上小田⁴⁷ 山崎町岩神社¹¹ 梯¹¹ 安富町関¹¹ 一宮町蓮華岩山国有林¹¹ 波賀町¹¹ 南光町船越山⁴⁷ 夢前町雪彦山⁴⁷ 林田川源流西カニワ溪谷⁴⁸ 六甲山¹¹ に分布している。

本種は食草として確認されていない。

(3) ミヤコアオイ

篠山町火打岩、小金嶽⁴⁷ 三嶽¹¹ 西ヶ嶽¹¹ 盃ヶ嶽¹¹ 西紀町上坂井⁴⁷ 下坂井¹¹ 佐中峠⁴⁷ 古市⁴⁷ 竜蔵寺¹¹ 多紀町小原、柏原町上小倉¹¹ 鐘ヶ坂¹¹ 下小倉¹¹ 春日町三尾山氷上町城田¹¹ 地下、加茂神社、市島町下鴨坂¹¹ 青垣町佐治、猪名川町肝川¹¹ 川西市東多田¹¹ 笹部¹¹ 一の鳥居宝塚市武田尾¹¹ 下丁、六甲山¹¹ 千種町三室山¹¹ 山崎町比地¹¹ 下牧谷⁴⁷ 三河⁴⁷ 上月町櫛田滝、竜野市鶏籠山⁴⁷ 相生市矢野町¹¹ 三濃山、瓜生、三河¹¹ 若狹野⁴⁹ 上郡町富満¹¹ 白旗山に分布している。

本種は、丹波地域の一部で食草として確認されているようであるが、¹⁰ ヒメカンアオイと分布の重なる地域が多く再調査が必要である。

(4) サンインカンアオイ

北但馬地区（豊岡市、出石郡、城崎郡、美方郡）ではギフチョウの記録のある場所に必ず分布している。南但馬地区：八鹿町妙見山⁴⁷ 大屋町須留ヶ峯¹¹ 天滝¹¹ 和田山町糸井、夜久野原¹¹ 大蔵⁴⁷ 朝来町山本¹¹ 奥田¹¹ 生野町栃原、大河内町川上¹¹ 栗、長谷¹¹ に分布している。

但馬地区及び市川上流地域のギフチョウは本種を食草としている。

(5) ヒメカンアオイ

東播磨南部、東播磨北部、阪神北摂地のギフチョウの記録のある地区は本種が分布している。

その他揖保川町馬場、丹南町古市¹¹ 当野⁴⁷ 西宮市塩瀬町⁴⁷ に記録があり、丹波地域にかなり分布していると聞か確認出来ない。

東播磨、阪神北摂地域のギフチョウは本種を食草としている。

丹波地域のギフチョウの食草となっている可能性は強い。

(6) ナンカイアオイ

洲本市柏原山、三熊山¹¹ 緑町広田、三原町諭鶴羽山南淡町賀集生子¹¹ に分布している。

本種は淡路島に分布し、ギフチョウの食草となり得ない。

II ウスバシロチョウ

兵庫県下における本種の研究の歴史は古く、山本(1978)によると今から81年前の1908年にその第一歩がしるされている。最初の採集地は西庄村(上月町)の小日山と西大畠との部落の近辺山裾のようで、井口宗平氏によって発見されたことが記されている。

その後暫く他の地域からの記録が出なかったようであるが、1940年代から1960年代にかけて県下の西部から北部一帯に数多くの生息地が見つかり、1970年代後半にはその数も約80ヶ所に及んでいる。現在では判明している産地の数は約190ヶ所に達しており、今後の調査でさらに産地が見つかるものと思われる。

1 分布の概要

(1) 西播磨地域

千種川、揖保川流域の広い範囲に分布し、夢前川と市川の上流にも限られた範囲ではあるが分布している。

夢前川流域の個体数は少ないが、他の地域では極めて多い。千種川支流の角亀川最上流地の新宮町二柏野が県下で現在生息する南限であるが、夢前川支流の夢前町菅生澗で採集された記録もある。

〈採集記録〉

上月町上秋里²² 西大畠²²

佐用町大畠、奥海²² 下石井、上石井、下村

千種町西河内¹³ 河内¹³ 千種¹³ 岩野辺¹³ 内の海、奥西山

荒尾、鷹ノ巣

南光町船越¹³ 西下野¹³ 下三河

三日月町三日月¹³ 春哉¹³ 本郷¹³ 添谷¹³ 湯浅口²² 鎌倉²² 中村²²

新宮町下筋原、二柏野²² 相坂¹³ 田幸、上筋原、角亀山崎町大沢²⁸ 土方、塩山²³ 段²³ 小茅野²³ 上ノ上²³ 上ノ下²³ 岩神社²³

一宮町高野¹³ 西公文²² 横山¹³ 倉床¹³ 阿舎利¹³ 黒原¹³ 小原¹³ 深河谷¹³ 福知¹³ 千町¹³ 上岸田²² 東河内²³ 東公文、富士野、志倉

波賀町音水、原、戸倉¹³ 道谷¹³ 前地、流田、鹿伏、平桑

夢前町坂根、熊部、佐中、馬頭、菅生澗¹³ 河原谷²²

大河内町上小田、川上

(2) 但馬地域

北西部はほぼ全域に分布し、個体数も多い。円山川中流部及び支流の出石川流域に分布の空白区域がある。

香住町鎧が現在確認されている北限である。

〈採集記録〉

豊岡市辻⁷ 伊賀谷⁷ 江野⁷ 目坂¹⁷

但東町大河内⁷

城崎町来日³ 雲光寺⁷

竹野町東大谷⁷ 門谷⁷ 二つ家⁷ 三原⁷ 河内⁷ 床瀬⁷

須野谷、銅山¹⁷ 熊谷⁷ 下村⁷ 森本⁷ 坊岡⁷ 鬼神谷⁷ 金原¹⁶ 河南谷¹⁶

香住町土生⁷ 畑⁷ 三川⁷ 本見塚⁷ 守柄⁷ 大谷⁷ 浅井⁷

小原⁷ 三谷⁷ 人原⁷ 三川山麓⁷ 大槻¹⁶ 八日市、鎧

日高町阿瀬溪谷¹³ 分尾¹³ 金谷(蘇武岳)⁷ 東河内⁷ 栗

栖野⁷ 名色⁷ 若林、石井¹⁵ 栃本¹⁵ 稲葉¹⁵ 山宮¹⁵

万却¹⁵ 万場¹⁵ 金山、山田¹⁵ 水口¹⁵ 田ノ口

村岡町大笹¹³ 蘇武³ 三川山³ 熊波¹³ 作山¹³ 境、山田、

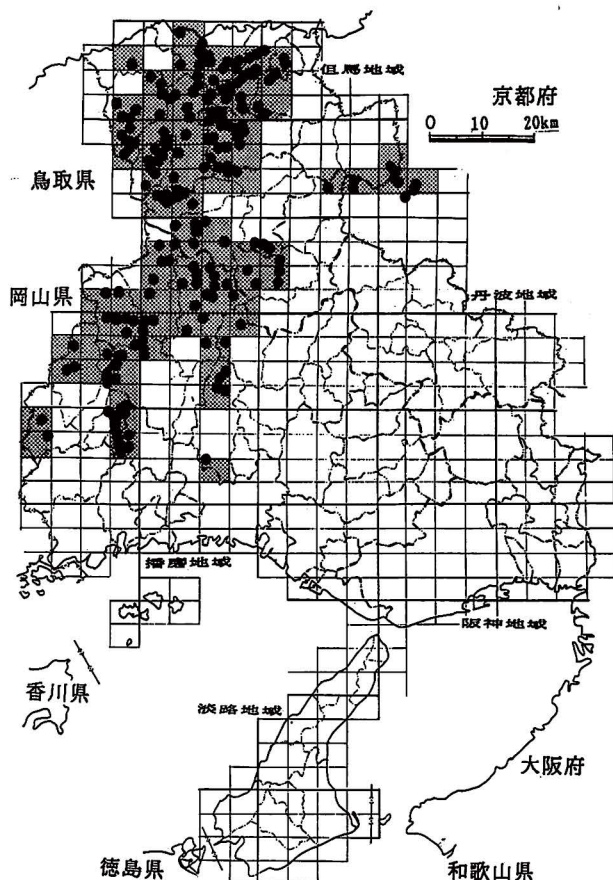


図2 ウスバシロチョウの分布図

味取、和佐父、用野、萩山、宮神
 温泉町青下¹³菅原¹³畑ヶ平¹³上山⁷霧ヶ滝⁷海上⁷桧
 尾⁷伊角、春來¹³中辻、田中、肥前畑、千谷、
 熊谷
 美方町熟田¹³神水¹⁴石寺、貫田、秋岡、新屋、忠宮、
 大谷、久須部
 浜坂町田若谷¹³池ヶ平¹³
 八鹿町石原⁷日畑⁷加瀬尾⁷妙見¹⁷
 養父町長野⁷餅耕地⁷井之坪¹⁷
 大屋町明延付近¹³横行¹³若杉、筏¹³仲間⁷栗ノ下⁷
 関宮町福定¹³大久保¹³丹戸¹³外野¹³葛畑¹³轟¹³別宮⁷
 氷ノ山山麓スキー場⁷草出
 朝来町奥田路¹³神子畑¹³八代⁷口田路⁷上八代¹⁷中田
 路⁴²
 和田山町竹ノ内¹³

(3) その他の記録

棲息地からかなり離れた場所でも採集された記録がある。神戸市北区淡河、箕谷では次の記録以外にも数回の観察記録がある²¹とのことであるが、その後再確認の報告はない。

(採集記録)

神戸市北区箕谷 1♂ 18-V-1969 加藤昌宏・武衛晴雄²¹
 ♀ 淡河 加藤昌宏・武衛晴雄²¹
 ♀ 有野町 1♂ 19-V-1979 加藤昌宏・武衛晴雄²¹
 西脇市出合 1♂ 11-V-1971 吉田豊

2 県下北東部の分布について

本種の県下に於ける産地は現在約190ヶ所が知られているが、そのほとんどが円山川本流と市川本流を結ぶ線の西側にあり、東側には生息していないだろうと考えられていた。

ところが、1967年に細見坦司氏によって和田山町竹ノ内にて発見され¹³、それから11年後の1978年にも同地で木下賢司氏によって6頭が採集された。¹³これが県下では円山川、市川以東の唯一の産地であったが、1981年に入って但東町大河内に産地が見つかり、⁷本種の分布について問題をなげかけていた。

従来生息していたものが発見されなかったのか、近年話題をよんでいるように分布を拡大しているのかは定かではないが、分布していることは事実である。

和田山町竹ノ内に県下の既知産地で一番近いところは八鹿町中村、養父町井ノ坪当りになると思われるがこれらの産地とはそれぞれ約18kmも離れており、移動してきたと考えるのは無理があり、むしろ隣接する京

都府の産地から移ってきたと考えるのが妥当であろう。

隣接する京都府福知山市や夜久野町の分布について京都蝶の会(1985)の文献と小野克巳氏にお伺いしたところ、福知山市の三岳山周辺の下野条、喜多、戸倉、上佐々木などには多産地が多いようで、但東町大河内の産地はこれらの地域から峠や山越えで移動してきたものが棲みついたものと思われる。

また、田辺広躬氏に御教示いただいたところ、夜久野町の鉄鉦山山麓の現世にて1950年代に1頭御本人が採集されたようである。その後は調査も行っていないので生息しているかどうかは不明であるとのことであったが、同町田谷にて1984年6月6日に木下賢司氏によって5♂が採集され、和田山町竹ノ内と山一つ隔てて本種が生息していることが明らかになった。

本種の分散については渡辺(1984)に報告されているように、山梨県の富士五湖の1つ西湖で行ったマーキング法による調査では、山を越えて1.4m移動した個体が3頭もあったようである。これらの結果から推測すると、和田山町竹ノ内の個体群は、夜久野町北西部の個体群が、但東町大河内の個体群は福知山市三岳山周辺の個体群から移動してきて棲みついたものと思われる。

近年分布拡大の記録が全国各地で報告されているが県下に於ても但東町、和田山町に於ける今後の推移が興味深いところである。他の地域については新産地は多く見つかったはいるが、今まで発見されなかったのか分布を拡大したものなのか不明である。しかし、山崎町土万のように近年本種が見られるようになったところも数ヶ所あるので県下全域での今後の推移を見守っていきたい。

3 垂直分布

県下のウスバシロチョウの産地で、標高の確認出来る180箇所について、西部播磨地域と北部但馬地域に分け、垂直分布の状況を表わしたのが図3である。標高数mから1000m付近まで広く分布しているのがわかる。

南部地域は上月町上秋里の標高80m付近が最も低い棲息地であるが、分布の中心は標高100m~500mの間で83%の産地がこの高さの範囲内に入っている。

一方北部地域の産地の標高は、南部より低い場所が多いようで、香住町八日市の矢田川河口付近では標高数mの河原にみられ、400m以下の産地が80%を占めている。但馬地方では南部で高地に分布する植物が低地で数多く見られる。湿度の高さが植物の夏期の消耗

を防いでいるものと思われる。本種が但馬地方で低地に棲息出来るのは、湿度の高さが大きな要因ではないかと推定される。

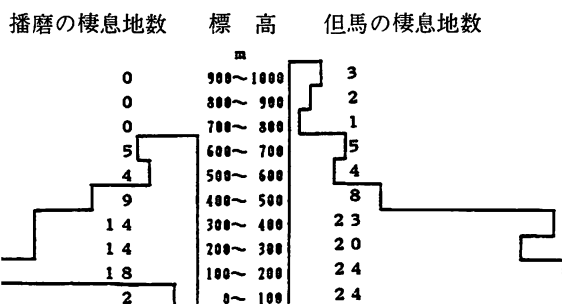


図3 兵庫県におけるウスバシロチョウの垂直分布図

〈参考文献〉

- (1)山本広一・吉阪道雄(1958)兵庫県産蝶類目録(1) 兵庫生物3(4):228-236
- (2)山本広一(1967)兵庫県のギフチョウについて 兵庫生物5(3/4):241-247
- (3)勝屋 潤(1982):三田・能勢地方のギフチョウ(1) きべりはむし10(1):1-7
- (4)環境庁 (1980)日本の重要な昆虫類近畿版 東京
- (5)多田 豊(1981)ミヤコアオイを中心としたギフチョウの食性試験 MDK NEWS 31(83):1-13
- (6)小林賢三(1930)六甲山麓にギフテフ 昆虫世界29(6):125
- (6)小林賢三(1930)六甲山の蝶相 関西昆虫学会報(1):69-73
- (7)木下賢司・前平照雄・福井丈嗣(1986)但馬地域の蝶類目録 IRATSUME(10):55-95
- (8)足立義弘(1978)来日岳と三川山のギフチョウ IRATSUME(2):26-27
- (9)石田達也(1982)ギフチョウ卵塊サイズの地方差について IRATSUME(6):10-18
- (10)尾崎 勇(1979)兵庫県のギフチョウ ひろおび(4):26-34
- (11)藤澤正平(1983)ギフチョウとカンアオイ ギフチョウ研究会 飯山市
- (12)但馬むしの会(1984)ギフチョウ情報あれこれ 昆虫ずかん(6):3-4
- (13)山本広一(1978)兵庫県のウスバシロチョウ 昆虫と自然13(7):30-33
- (14)島田真輔(1982)美方町の蝶 IRATSUME(6):25-29
- (15)足立義弘・谷角素彦(1982)神鍋のウスバシロチョウの分布調査 IRATSUME(6):1-4
- (16)木下賢司(1982)但馬におけるウスバシロチョウの新産地 IRATSUME(6):8-9
- (17)木下賢司(1983)但馬におけるウスバシロチョウの新産地Ⅱ IRATSUME(7):15-18
- (18)足立義弘(1983)神鍋のウスバシロチョウ分布調査Ⅱ IRATSUME(7):7-13
- (19)足立義弘(1983)神鍋のウスバシロチョウ分布調査Ⅲ IRATSUME(8・9):17-24
- (20)足立義弘(1983)神鍋のウスバシロチョウの食草IRATSUME(8・9):150
- (21)加藤昌宏・武衛晴雄(1981)神戸の蝶 神戸市立教育研究所 神戸
- (22)唐土洋一(1979)西播におけるウスバシロチョウについて てんとうむし(5):12-13
- (23)岩村 巖(1980)西播の蝶分布資料 ひろおび(5):2-9
- (24)渡辺通人(1984)ウスバシロチョウの分散について 蝶と蛾 34(4):175
- (25)北原正彦(1986)ウスバシロチョウ個体群の生態 昆虫と自然21(7):26-31
- (26)谷角素彦・黒井和之(1987)但馬産ギフチョウのウスバサイシンの産卵例 IRATSUME(11):102
- (27)尾崎勇・高嶋明(1984)兵庫県明石地方のギフチョウ 昆虫と自然19(2):10-15
- (28)京都大学蝶類研究会(1987)日本産蝶類239種の記録(上) SPINDA(2):2-40
- (29)仲田元亮(1982)能勢の昆虫 自刊
- (30)大阪昆虫同好会(1981)北摂の昆虫(1)蝶類 尼崎市
- (31)高橋 匡(1979)但馬地方昆虫目録(予報第1報) IRATSUME(3):44
- (32)島田真輔(1982)美方町の蝶 IRATSUME(6):26
- (33)岩村 巖(1968)西播の蝶分布資料(5)兵庫生物5(5):388
- (34)西村公夫(1967)播州高原の蝶類について 兵庫生物5(3/4):226
- (35)岩村 巖・中谷貴寿(1964)兵庫県における蝶分布資料(3)兵庫生物4(5):242
- (36)猪股涼一・岡本清(1962)多可西脇地方の蝶類(追報)兵庫生物4(3/4):177
- (37)木下賢司・前平照雄・福井丈嗣(1986)但馬地域の蝶類目録 IRATSUME(10):63
- (38)黒井和之(1988)但馬地方のギフチョウの新産地の記録 IRATSUME(12):78
- (39)黒井和之(1988)浜坂町城山の蝶類 IRATSUME(12):11-13

- (40)品川 恭(1988)ギフチョウの獣糞吸汁行動を観察
crude (32):31
- (41)T. M. (1987)1987年4月ギフチョウ貧果 Bug (16)
:4-5
- (42)杜 隆史(1987)兵庫県神崎郡朝来郡における採集記
録 のせ(149):42
- (43)京都大学蝶類研究会(1987)日本産蝶類238種の記録
SPINDA (1):9~41
- (44)谷角素彦・黒井和之(1987)但馬産ギフチョウのウス
バサイシンへの産卵例 TRATSU
M (11):102
- (45)京都蝶の会(1985)京都蝶類採集記録リスト追加デー
タ 杉峠(9):2
- (46)渡辺康之(1979)兵庫県・武田尾周辺のギフチョウ
昆虫と自然14(2)
- (47)紅谷進二(1971)兵庫県植物目録 六月社書房 大阪
- (48)兵庫県生物学会(1981)播磨の植物 神戸新聞出版セ
ンター 神戸
- (49)神戸新聞社(1989)ギフチョウ優美な羽化 神戸新聞
4月7日朝刊

県下に於ける蝶数種の 産卵に関する記録

広畑政己

1 キタテハが枯草に産卵

1986年6月8日に姫路市打越にて枯草に産卵する本種を観察することができた。通常は食草の葉裏に産卵されるが、¹ このような例は珍しいと思われる。食草に産卵しようとして間違っすぐそばの枯草に産卵したということではなく、後をつけて観察していると3ヶ所で枯草に産卵し、1卵も食草には産卵せずとび立っていった。

2 クロアゲハが食樹の幹に産卵

福田他(1982)によれば、普通卵は食樹の葉裏に1個ずつ産みつけられ、時には葉表や若い茎にも産卵されることが記されている。

1987年8月26日に姫路市打越にて写真のように幹の直径が約2cmもあるミカンに産卵する本種を目撃した。産卵したのは8卵であった。これまで葉や葉柄には何回となく産卵するのを目撃しているが、このように幹(樹高約2mの幼木)に産卵するところを観察できたのは初めてである。



食樹の太い枝に産卵されたクロアゲハの卵

3 ミドリシジミの産卵行動

古い記録になるが1978年6月24日午後3時30分ごろ姫路市御立北山にて本種の産卵行動を目撃した。本種はzephyrusの中でも分布が広く、目にふれることも多いので産卵行動の観察例も報告されていると思うが産卵時期、産卵時間など参考になればと報告した。

産卵したのは先端が切り取られた樹高が約1.5m、幹の直径が約5cmのハンノキで、飛来した個体はハンノキの葉上にとまり、葉から小枝へ、小枝から太い枝へと頭を前にして進み、枝の分岐部やくぼみに尾端を前後左右に動かしながら、産卵箇所を認識し、1卵〜3卵を産付していった。産卵行動は約5分間続いたが産卵数は少なく10卵産卵した後飛び去っていった。

ヒサマツミドリシジミやハヤシミドリシジミのように産卵時期が遅い種もあるが、本種は羽化後はあまり期間をおかずに産卵をするようである。

(参考文献)

- (1)福田晴夫他(1983)原色日本蝶類生態図鑑(Ⅱ)保育社 大阪
- (2)福田晴夫他(1982)原色日本蝶類生態図鑑(Ⅰ)保育社 大阪

Masami Hirohata

姫路市

ウラナミジャノメの幼虫を メリケンカルカヤから発見

近 藤 伸 一

ウラナミジャノメの野外での食草はほとんど知られておらず、過去にカヤツリグサ科の一種ヒカゲスゲに似たカヤツリグサ科の一種及びササクサからの3例から幼虫が確認されたにすぎない。1987年7月26日明石市松蔭新田でメリケンカルカヤの葉上にウラナミジャノメの中令幼虫（体長7mm）を発見した。幼虫のいた場所は乾燥した尾根部（成虫がよく活動する明るい広場から約100m程離れている）の山道に面した所で、モッコク、ソヨゴ、コバノミツバツツジ等に覆われた日陰に生えているメリケンカルカヤのたれ下った葉の先端の裏側に幼虫は静止しており、4枚の葉に食痕がみられた。当日は晴天で、午後3時頃であったが、この場所はかなり暗く、F・2.5 S・1/8 で写真撮影したが光量が不足した。

メリケンカルカヤは北アメリカ原産の多年草で、戦後名古屋を中心に全国的に広がったもので、ウラナミジャノメの本来の食草でないことは明らかである。当地のイネ科植物ではメリケンカルカヤの勢力が最も強く、カヤツリグサ科の植物も近くの湿性地には数種自生している。付近を3日間にわたり調査したが他に幼虫を発見することは出来なかった。またこの調査に先立ち、成虫の産卵する6月下旬にも卵の調査を行ったが、発見することは出来なかった。

なお当地にはウラナミジャノメとヒメウラナミジャノメの両種が棲息しているが、成虫の発生時期は少し異なっているので両種の採集・目撃記録を参考までに次表に記す。本稿を草するに当たり、調査に同行していただいた浅田卓、食草を同定していただいた広畑政己の両氏にお礼申し上げる。

表1 ウラナミジャノメ、ヒメウラナミジャノメの採集・目撃記録

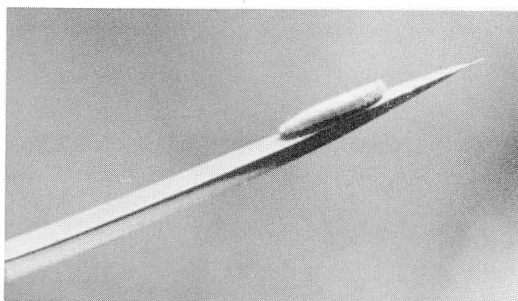
月 日	ウラナミジャノメ	ヒメウラナミジャノメ
1987. 6.14	2♀ 5♂ 新鮮	2exs 汚損
6.21	2♀ 4♂ 5exs	0
6.27	3exs 汚損	0
6.28	2♀ 3exs 汚損	0
7.25	0	5 exs 新鮮
7.26	1 幼虫	8 exs 新鮮
8. 2	0	2 exs 新鮮



幼虫の発見場所（指をさしている所）



メリケンカルカヤの幼虫（矢印）



幼虫の拡大

〈参考文献〉

- 福田晴夫ほか(1984)原色日本蝶類生態図鑑(Ⅳ) (保育社) 大阪
長田武正(1984)野草図鑑3 (保育社) 大阪

S hinichi Kondo

神戸市西区

広島県東部と岡山県の

ベニモンカラスシジミの採集地報告

佐々木 薫

1957年6月、愛媛県温泉郡重信町皿ヶ嶺で初めて採集され、同年11月新種として記載された。日本産のカラスシジミ属の中では♂の前翅表に橙紅色斑が明瞭に現れる唯一の種で現在のところ日本特産種とされる。

1959年に生活史の概要が発表されたにもかかわらず長い間皿ヶ嶺だけに生息する稀種とされ、天然記念物に指定された。

1969年になって岡山県新見市で新しく生息地が見つかったから後は、つぎつぎと新しい分布地が判明している。

〈分布〉 本州西半部と四国に分布する。

本州では静岡（北西部）、長野（南部）、岐阜、三重、奈良、兵庫（北西部）、岡山、広島各県で確実な記録がある。

愛知県下では天竜川流域で採卵、飼育されているが報告はなされていない。

島根県横田町でミヤマカラスシジミの卵に混じって採集された合計9卵は飼育に失敗し、羽化させていないが、多くの人たちが本種の卵であると同定している。

鳥取県の採集記録は誤認、滋賀・岐阜両県の採集記録も疑問である。和歌山県では現在のところ確実な報告はなく、山口県でも採集されていない。

四国では愛媛、高知、徳島の3県に分布するが、香川県では採集されていない。

未発見の九州では、地質などの点から大分県国東半島などに分布する可能性がある。

以上が現在までに知られているベニモンカラスシジミの分布状況である。

小生と播磨蝶友会のメンバーが本種に興味をもち採卵を始めてから現在までに確認している採集地を報告し更に今後は同地域だけでなく出来れば新しい分布地を発見出来るよう頑張りたい。

- | | |
|------------------|-------------|
| 3. 岡山県阿哲郡哲多町大字老栄 | 26卵採集 3 I |
| | 1979 佐々木薫 |
| 4. 岡山県川上郡成羽町黒鳥 | 25卵採集 12 II |
| | 1979 佐々木薫 |
| 5. 岡山県高梁市中井町川上 | 23卵採集 24 II |
| 6. 岡山県阿哲郡哲多町川上 | 23卵採集 20 I |
| | 1985 佐々木薫 |
| 7. 岡山県阿哲郡哲多町蚊家 | 1卵採集 20 I |
| | 1985 佐々木薫 |
| 8. 岡山県高梁市中井町西方 | 3卵採集 23 II |
| | 1986 佐々木薫 |
| 9. 岡山県川上郡備中町田原 | 13卵採集 19 II |
| | 1989 佐々木薫 |
| 10. 広島県神石郡神石町野方 | 18卵採集 23 X |
| | 1983 佐々木薫 |
| 11. 広島県比婆郡東城町三坂 | 9卵採集 12 XI |
| | 1983 佐々木薫 |
| 12. 広島県比婆郡東城町川東 | 5卵採集 2 II |
| | 1985 佐々木薫 |

※ 採集した卵については飼育の結果ベニモンカラスシジミであることを確認していることも報告しておく。

〈参考文献〉

- (1) 福田晴夫ほか(1984) 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅲ) 保育社 大阪
- (2) 難波通孝(1988) 日本の昆虫(11) ベニモンカラスシジミ 文一総合出版 東京

Kaoru Sasaki

兵庫県相生市

- | | |
|-----------------|-----------|
| 1. 岡山県新見市石蟹町下長屋 | 5卵採集 15 I |
| | 1978 佐々木薫 |
| 2. 岡山県新見市石蟹町 | 2卵採集 15 I |
| | 1978 佐々木薫 |

春季に於けるモンシロチョウ属2種の生態

広畑政己・近藤伸一

1 はじめに

筆者らは以前に兵庫県夢前町熊部を訪れた際、谷川沿の同じ所を一定方向に通過するスジグロシロチョウを何頭も見て、本種にもアゲハチョウ科のように蝶道らしきものがあるのではないかという疑問をいだいたことがあった。

そんなことがきっかけで、スジグロシロチョウの行動について調べてみようということになり、今回のマーキング調査となったわけであるが、結果はマーキングしたうちの何頭かは同一地点に戻ってはきたが規則的なものではなく期待はずれに終わった。しかし、スジグロシロチョウの調査に加えモンシロチョウのマーキングも行い若干の知見を得られたのでその内容を次に報告しておきたい。

2 調査地の概要

調査地の熊部は雪彦山の東側に位置し、夢前川上流の最も奥の集落で、佐中を過ぎ山間の県道を進むとボツンととり残されたように現れる。集落の標高は260m～280mで、杉や桧で植林された500m～600mの高さの山に囲まれている。集落の入口から最も奥までの距離は約900m、平地の幅は100m～200mと細長く、その中に10数戸の民家が点在する。民家のまわりはすべて畑地で、畑にはアブラナ、タカナ、ソラマメ、キャベツが栽培され、谷川沿にはオオバタネツケバナ、ヒロハコンロンソウが生育している。

調査地点は集落の最も奥の山間部に入った木々に囲まれた川筋（S地点一写真1）、道路と山の間を流れる川筋（T地点一写真2）、民家に囲まれた畑（L地点一写真3）、集落のほぼ中央にあり、道路をはさんで東西にキャベツ畑、レンゲ畑、休耕地のある開けた地点（H地点一写真4）、谷川が本流に流れ込むその周辺の畑地（E地点一写真5）、山と川にかこまれた民家周辺の畑（U地点一写真6）、集落の入口付近（C地点一写真7）で行った。

S地点の奥は雪彦山に源を発する夢前川の源流となり、しばらくは植林地の中を林道が続く。また、C地点の南も数kmに亘って山あいの道が続き、熊部は孤立し

た特殊な環境といえる。これが調査地の概要である。

3 調査方法

調査は1985年4月28日の10時～16時までと5月3日の9時～15時までの2日間で実施した。図1のように熊部部落をS.T.L.H.E.U.C.の7地点に分け、各エリアを万遍なく歩き回りながら捕獲しマーキングを行った。

マーキングは捕えた個体の後翅裏面にその地点の記号と個体の番号を記入し、ノートに捕えた時間と地点の記号、個体番号を記入し放すという方法で行った。

スジグロシロチョウはT地点では4月28日の11時～13時30分まで、5月3日にはS地点で13時30～14時30分の間のみ定点観察を行った。

この結果、モンシロチョウは92頭、スジグロシロチョウは67頭のマーキングをすることができた。その内容は表1の通りである。

表1 地点別マーキング数

種	性別	地点	T	L	H	E	S	U	C	計
スジグロ シロチョウ	♂		32	5	7	2	7	1	1	54
	♀		5	2	1	2	0	2	0	12
計			37	7	8	4	7	3	1	67
モンシロ チョウ	♂		1	12	22	14	0	11	2	62
	♀		0	2	9	7	0	9	3	30
計			1	14	31	21	0	20	5	92

4 スジグロシロチョウの活動について

T地点での定点観察ではマーキングした個体37頭中16.2%に当たる6個体が同地点を2時間30分の間に再び通過したが、他は同地点には戻ってきていない。もう少し詳しく状態を述べると、T-1の個体は11時15分にマーキングし、その後、11時55分、12時14分、13時19分の3回同地点を通過している。T-4の個体も12時26分にマーキングをし、12時、12時46分、13時9分の3回元の地点に戻っている。その他4個体も1回～2回T地点を通過しているが、残り83.8%はT地点には戻っていない。

調査地の概要



写真1 S 地点

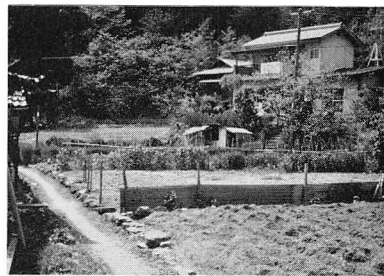


写真3 L 地点

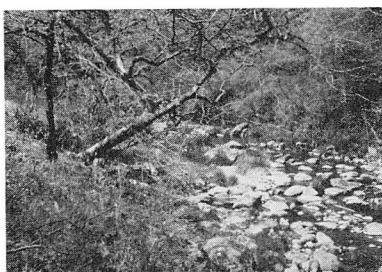


写真2 T 地点

図1 調査地概要図

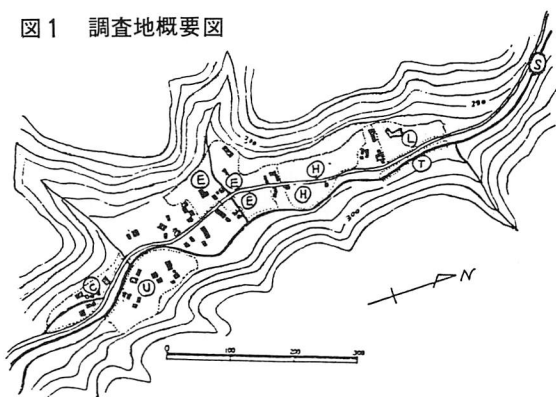


写真4 H 地点



写真6 U 地点



写真5 E 地点

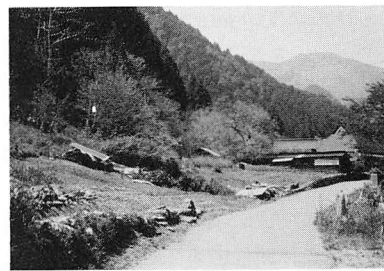


写真7 C 地点

T地点では通過する個体をほぼ完全に確認したので、定まったコースを定時間に活動するというパターンはないようである。当初T地点を同一個体が蝶道をつくり、通過するのではと感じたのは、T地点はスジグロシロチョウの好む環境で、たまたまその地点を何頭ものスジグロシロチョウが通過していたということのようである。

モンシロチョウが暗いT、S地点では見られないのに対し、本種はマーキング数67頭中T、S以外の地点で30頭も捕獲しており、明るい開けた環境にも適応しているようである。

また、活動範囲も広く、T地点でマーキングした個体をすべての地点で再捕獲している。T地点から最も遠いC地点でも再捕獲しており、距離にして900mは移動していることになる。ただ、本種の飛翔から見て調査地の熊部部落以外へも移動しているものと思われるが川下の佐中などの調査は行っていないので定かでない。しかし、マーキング数に対し再捕獲数が11頭と少ないのはそのことを物語っている。

この他の記録として、4月28日にマーキングをした雄39頭雌7頭のうち、5月3日に再捕獲できたのは雄4頭雌3頭となっており、雌の再捕獲率が高くなっている。雌の生命力、発生時期の問題なのか、雌は雄と比較してあまり広範囲に活動しないかわからないが、記録として残しておきたい。

5 モンシロチョウの活動について

マーキング数は雄62頭雌30頭計92頭で、この内マーキングした地点から他の地点に移動が確認できた個体は22頭である。

活動範囲は狭く、隣接する地点から外へ出る個体は少ない。再捕獲した個体22頭の内73%が隣接地点からのものであり、調査地のほぼ中央に当たるH地点で再捕獲した個体9頭もすべて隣接するL、E地点でマーキングした個体である。

再捕獲した個体で最も長距離を移動したのはL地点からU地点への移動で、距離にして約460mが1例あるが、再捕獲した22頭の平均移動距離は185mである。

モンシロチョウの好まない谷川沿いのS、T地点を除けばすべての地点で食草も吸蜜植物もあり、移動があっても何ら不思議ではないが、前述の通り広範囲の行動は確認できなかった。

6 熊部に於ける食草と吸蜜植物

当地域で確認できたモンシロチョウの食草は、アブラナ、タカナ、イヌガラシ、キャベツ、ハボタンの5種で、スジグロシロチョウの食草はイヌガラシ、ヒロハコンロンソウ、オオバタネツケバナの3種が確認できた。

食草の生育場所の関係で、谷川沿に生育するヒロハコンロンソウ、オオバタネツケバナからはモンシロチョウの卵は発見できなかった。反面、畑のイヌガラシからはスジグロチョウの卵が見られた。

食草への産卵位置はタカナで調べたモンシロチョウの卵では葉の裏面93、表面19で、ヒロハコンロンソウのスジグロシロチョウの卵は裏面41、表面11となっており葉の表への産卵も殊の外多い。

吸蜜植物はモンシロチョウでタンポポ、アブラナ、ソラマメ、エンドウ、キンポウゲ、ダイコンが見られた。スジグロチョウではオドリコソウ、ソラマメ、ダイコン、タンポポ、ミツバウツギ、ヒロハコンロンソウ、エンドウ、オオバタネツケバナなどがあり、モンシロチョウより活動範囲が広い分だけ吸蜜植物も多い。

6 おわりに

そもそもの目的がスジグロシロチョウの蝶道の調査ということで始まり、それがモンシロチョウのマーキングにまで発展したため、1日を通じての活動時間帯などの結果が得られず残念であった。

また、1年間を通じての調査を行えば、春季と夏季では生態面でもかなりの差があるのではないと思われるし、観察場所も熊部のような孤立した環境ではなく周辺が開けた移動しやすい場所であれば結果は違ったものになっていたかもしれない。

ともかくスジグロシロチョウはT地点でマーキングした37個体が元のT地点には帰らず、広範囲に活動し定まったコースを定時間に飛翔する蝶道らしきものは認められなかった。

一方、モンシロチョウは活動範囲も極めて狭く、平均値で185m、最も移動している個体で460mということが確認できた。次の機会には別の地域で春季に調査をしてみたいと考えている。

兵庫県の蝶雑記 (2)

広 畑 政 己

1) ナガサキアゲハ大発生後の分布について

本種は1976年ごろまでは県下では稀に見かける程度で土着種としては考えられていなかったが、1977年には多くの個体が採集され、その後現在に至るまでさらに分布を広げ、南部一帯に土着するようになった。

1983年には少ないながら内陸部からの記録も散見されるようになり、近年は北部からの記録も聞くようにまでなっている。その後の記録を拾ってみると、南部では大河内町峰山、一宮町曲理、市川町上牛尾、南光町船越、安富町安志、山崎町今宿、夢前町文殿等があり船越、安志、今宿では春季に確認されている。上牛尾に於ては1986年に蛹で越冬し、翌春羽化している。これらの状況をみると当地に於ては土着するための条件として、気温の問題が上げられていたが、これが主な条件ではないように思われる。

一方北部では1982年に豊岡市で初記録があり、¹ 1986年には日高町²と豊岡市³で採集目撃記録があり、1988年7月には浜坂町久斗山で2♀が採集されている。⁴

2) アサギマダラの移動に関する記録

1986年9月7日に氷ノ山の坂の谷林道にて本種のマーキング調査を行った。午前10時から午後1時30分の間に47頭にマーキングして放したが、その後再捕獲されたという便りは残念ながら入っていない。氷ノ山でマーキングした個体は氷の山と明記し、⁹/₇と日付がうってあるので、もし目撃または採集された方があればぜひ御連絡いただきたい。

毎年8月上旬から中旬にかけてはかなりの個体が見られるが、9月に入ると数が減るようである。またマーキング中に感じたことであるが、47頭をマーキングして放した後、3時間30分の間に再捕獲した個体は僅か3頭であった。吸蜜植物もふんだんにあり、元の場所に戻ってもよいと思われるがこのような結果になったことは興味深い。

この他の移動に関する記録として1986年9月7日に赤穂市周世にて西の山に向って移動する本種を目撃した。同日龍野市でも揖保川の上空を東方から西に向って移動中の本種を目撃しているので報告しておく。

3) 新宮町二柏野で採集した *zephyrus* の卵

1985年1月6日に新宮町二柏野でウラジロミドリシジミの卵を5卵、ウスイロオナガシジミの卵を8卵採集しているので報告する。当地では初記録と思われる。この他にミズイロオナガシジミ、アカシジミも採卵している。産卵していた木はいずれもナラガシワである。

4) ウラナミシジミが牛糞を吸汁

1988年9月25日に上郡町大枝新にて牛糞に吸汁に来たウラナミシジミを観察した。吸汁していたのは3頭の雄ですべて新鮮な個体であった。吸蜜植物キク科マメ科などかなり広い範囲で知られているが、このような例は聞かないので報告をする。

5) コムラサキの越冬についての知見

1984年11月25日に千種町鍋ヶ谷にてカワヤナギで越冬している幼虫を確認した。幼虫は5頭で、幹の直径約15cmの地上1m 50cm～2mの北側に4頭と北西側に頭見られた。

幼虫の静止した頭の位置は上向が3、下向が1、横向が1で定った方向性はなく、樹皮のくぼみ等に併せているようであった。珍しくないかもしれないが書き留めておきたい。

本文を草するに当り次の方々にお世話になった。ここに記して御礼申し上げる。

近藤伸一、高嶋明、花岡正、谷川勝彦、山下剛史、徳岡正巳、上田倫範、稲田和久（順不同敬称略）

〈参考文献〉

1. 広畑政己(1987)兵庫県に於けるナガサキアゲハの分布の変遷について 昆虫と自然 18(5):18-22
2. 上田尚志(1987)城崎郡日高町でナガサキアゲハを採集 IRATSUME(11) 100-101
3. 木下賢司(1987)豊岡市内でナガサキアゲハを目撃 IRATSUME (11):101
4. 但馬むしの会(1988)サキアゲハ浜坂町で採集される。混蟲ずかん(20):1

Masami Hirohata 姫路市

ギフチョウの累代飼育について

八 木 弘

☆はじめに

ちょうちょ、ちょうちょ葉の花にとまれ、葉の花にあきたら桜に、とまれ、昔から歌に唄われた、この歌に出てくる蝶は、モンシロチョウか？ギフチョウか？私は桜の開花に合わせて出現するギフチョウが一番相応しいと思う。黄色と黒のだんだら模様。裾に赤をのぞかせた粹な姿、夏・秋・冬の長い時期を蛹で過ごし、春先やっと眠りから覚めて蝶となり、花を訪れる様は、春の女神と云う形容が似つかわしい。蝶愛好家を一度は魅了させたギフチョウ、それだけに、よく調査研究され、飼育についても多く試みられていると思う。

生息地が低山地や、人家に近い山麓部に多いため、宅地造成、植林など開発が進み環境破壊による絶滅地も多いと聞く。この様な状態の中、乱獲に因る絶滅だけは避けたいと思う。頭数を多く必要とする向きは飼育によるべきと思い、初心者参考に成ればと飼育について、私の経験を記してみる。

☆累代飼育の試み

御存じの様に、累代飼育とは、飼育し羽化させた成虫を、室内で何代にもわたって飼育する事である。

私の試みは「初代の親蝶」昭和56年4月中旬、多可郡中町で採集した♀一頭の採卵から始まる。

☆人工採卵の準備

まず、捕虫網の大きさに合わせて、竹枠又は金枠を作り、捕虫網を架ける。鉢植えの食草「ヒメカンアオイ」コーラーの空き缶などに、葉の花や大根花などをさして、♀蝶といっ緒に網の中に入れる。

以上で採卵準備完了である。

置き場所は、窓際か、屋外の日だまりの暖かい所を選ぶ、産卵の条件は蝶が元気である事、晴の日で暖かいこと、15度C以上が望まれる。屋外に置く場合には風で網が飛ば無い様に、網の下部に石等の重しを置くことを忘れぬ様に。

給餌は、自ら中に入れてある葉の花等から呼蜜するが、一日に1〜2回霧吹きで水を網の上から吹き付けてやると良い。

花などの蜜源が無い時は、水を霧吹きで網の上から吹き付けると吸水を始めるから、小さく切った脱脂綿に蜜を浸し、ピンセットで吸水している所へ付けてやると、そのまま吸蜜する。

【参考】樹液などを好み花にこない蝶の給餌は、この方法が有効である。人工給餌の場合の「エサ」は、砂糖水、ハチミツ、カルピス、「果汁」パイン、リンゴ、ブドウ、トマト、西瓜、桃、等を与えてみた。

樹液などにくる蝶は果汁のほうが良いと思う。

余談が入ったが上記それぞれの方法で飼育し晴の暖かい日が1〜2日続けば充分産卵してくれる筈である。12度C以下では活動せず産卵は期待出来ない。

☆飼育要領

卵は産卵直後は、青白色で、孵化前に成ると、灰褐色に変わる。鉢植えの食草に産卵させた場合は、そのまま飼育箱に入れても良いが、私は、卵が灰褐色になると、卵の付いた食草をもぎ取り、弁当箱程度の大きさの「パック」で飼育した。この方が管理し易い。飼育用「パック」は女性用「ストッキング」を輪切りにして、ふたとし、天敵を防止する。もぎ取った食草の葉柄の切り口をぬれた綿で包み更に上からアルミ箔か、ビニールを包んでおくと長持ちします。食草が萎れてくれば取替えてやります。幼虫が4〜5齢になると分散を始めます。分散を始める頃になると、飼育箱を「ミカンの空きダンボール箱」に変えます。箱の上部は防虫網を掛けておきます。この時期から、幼虫の食欲は旺盛となります。一日に食べる量を見計らって、一日一回、又は朝夕食草をほり込んでやればよいわけで、ギフチョウの飼育は容易です。

幼虫が終齢近く「体長30mm」を越えた頃飼育箱の中に、割箸などを2本平行に敷き、その上に素焼きの5〜6号鉢を逆さにして置きます。別図1参照、鉢の下部に7〜8mmの隙間ができます。終齢幼虫は、その隙間から、鉢内に入り側面に付着して「サナギ」となります。飼育幼虫の多い時には途中で鉢を換え分離して管理します。万一の場合の安全のために。

ギフチョウは、元々、半ば地中に潜り込んで「サナギ」に成る習性があると言われているので、上記の様に鉢を伏せて内部を暗くしておく、恰好の場所として、全部潜り込んで「サナギ」となります。この様に鉢内で「サナギ」にして置くと、後の管理がし易くなります。

☆「サナギ」の管理の仕方

蛹期は夏・秋・冬を通し9か月にもおよびますのでその管理には充分の注意が必要です。

屋外の木陰などを選び土中にサナギの着いた鉢を埋め込みます。雨水が流れ込まないように、鉢の上部は20mm程地上に出しておき、サツキ用の浅鉢で覆います。鉢内にはなにも入れません。隙間が無い様に土盛して目張りします。別図2参照、鉢の水抜き穴は、防虫網を接着剤で張り付けます。真夏は、落ち葉などを掛けて熱気を避けます。土中の湿気が、素焼き鉢を通して、「サナギ」の乾燥を防いでくれますが、真夏の雨がなくて乾燥の激しい時は、時々冠水してやります。秋冬の季節にはあまり気にせず放置して於いても大丈夫です。

これで春先には100%の羽化も期待出来ます。

【注】土中に埋める適当な場所が無い場合は、箱などに土か、砂を入れその中に、鉢を埋め込むのも良いかも知れません。

☆羽化準備

3月も下旬に入ると鉢を室内に取り込み窓際の日がよく当たる所に置いてやります。蝶は、たいてい高い所にぶらさがって「ハネ」を伸ばしますから、ぶらさがる足がかりに、木の枝、割箸などを、鉢の中に立て掛けてやります。暖かい天気の良い日に羽化がはじまります。

飼育は一応これで終わりますが累代飼育はこれから始まります。

☆交尾

S57年羽化した蝶の交尾を試みる、その結果はつぎの通り

1. 3月26日羽化した♂と27日羽化した♀A
2. 3月28日羽化した♂と29日羽化した♀B
3. 3月28日羽化した♂と29日羽化した♀C

上記の3通りを試みる。

1. A蝶27日午後1時交尾…交尾時間約40分
2. B蝶…29日午後12時45分交尾…交尾時間約45分
3. C蝶…30日午前11時53分交尾…交尾時間約50分

上記で見るかぎり条件が良ければ、♀蝶の羽化した其日内に、交尾を済ませる様。

注・採卵の時と同じく捕虫網の中に吸蜜の花と♂♀ペアで入れ窓際に置いて試みた。

☆採卵

人工採卵の項で前述した要領で「1 A蝶」と「2 B蝶」で採卵した。

4月1日 A蝶16卵 B蝶10卵

4月2日 A蝶13卵

4月5日 B蝶19卵

「B蝶の産卵3日間の空白は、天候不順によるものです。

その後の孵化、飼育、サナギの管理は前述の通りで

す。後は来春を待つのみ。

S58年

1. 4月5日羽化した♂と4月6日羽化した「♀A」
 2. 4月6日羽化した♂と4月7日羽化した「♀B」
- 上記2通りを「ペア」として交尾を待つ。

☆交尾

1. 「♀A」蝶…6日午前10時30分交尾
2. 「♀B」蝶…8日午後1時15分過ぎ交尾

☆採卵

採卵は「♀A」蝶のみで行った。

8日…2卵 9日…15卵

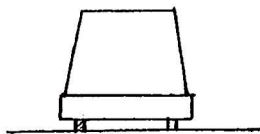
以上の産卵を見たので、一応の目的を果たしたものとして、その後の飼育を打ち切った。

☆あとがき

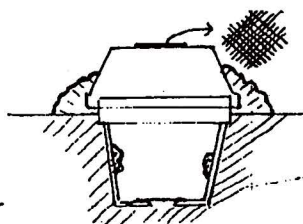
ギフチョウの累代飼育の成否は天候に左右される面が多い。その為、交尾、産卵に適した気温を得るために、羽化の時期を遅らせ、暖くなる桜の開花時期に合わせる工夫も必要だ。

私の試みでは、S57年度の羽化は3月26日から始まっている。此れは3月下旬に「サナギ」を室内に取り込んだ場合である。S58年度は4月5日から羽化が始まっている。S57年度と比べ、10日間遅れている。此れは「サナギ」を室内に取り入れず、屋外で羽化させたからである。この様に出来るだけ暖かくなってから羽化させると、交尾、産卵の条件が調えやすい。何れにしても、羽化、交尾、産卵を終らせるには少なくとも10日間は、成虫を元気に飼育することである。此れから飼育される方の少しでも参考になれば幸いです。

参考図(1)



参考図(2)



〈参考文献〉

森内茂・永井正身 著 昆虫の飼い方1

HIROSHI YAGI

相生市

南西諸島の迷蝶二種

入江 照 夫

南西諸島の宮古島と石垣島に於て、二種の迷蝶を採集したので報告する。

(1) ウスコモンマダラ

1984年6月9日、沖縄県平良市下崎にて。

サトウキビ畑が続く道筋をリュウキュウアサギマダラが無数に飛び交う中の一頭を何気なく採集したものである。数多く標本もあり各地のものを2〜3頭ずつ採集する様になっている。

後日帰宅して、展翅していた際にリュウキュウアサギマダラと異っているのに気付いたのである。小破していたが新鮮な♂であった。

無数いた中の偶然の一頭であったのか、他にも多くいたのかは定かでない。

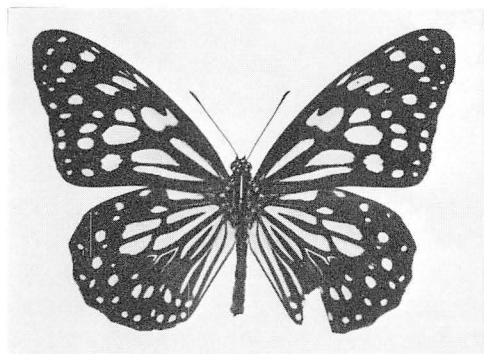


写真1 ウスコモンマダラ(表面)

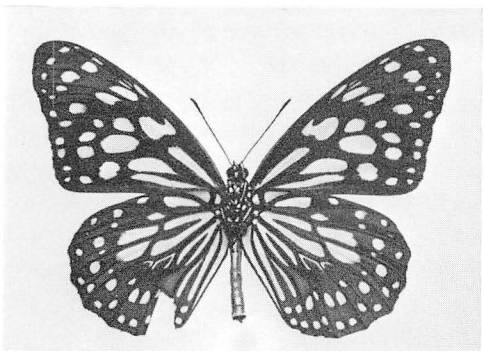


写真2 ウスコモンマダラ(裏面)

(2) オナシアゲハ

1985年7月15日、沖縄県石垣市登野城にて。

パンナ岳裏登山口を少し登った所にヤエヤマムラサキが多く飛んでいる場所があり大破したものが多かったので採集を止めて強い陽ざしを避けて、木陰に座って流れ出る汗を拭いていた時、眼の前を横切る黄色い蝶があり名も知らぬ白い花に止った。

見慣れぬ蝶であったが一目でそれと判る。高鳴る胸を抑え慎重にネットを振った。完全な鮮度であった。このポイントはルリマダラ属が時々採集することが出来ると土地の人は話してくれた。

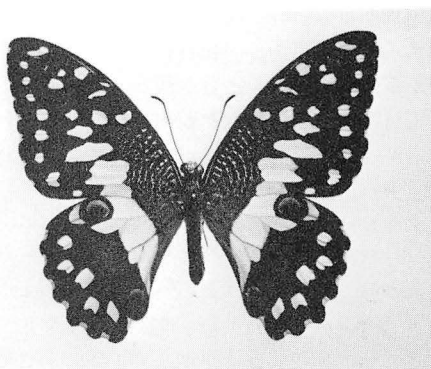


写真3 オナシアゲハ(表面)

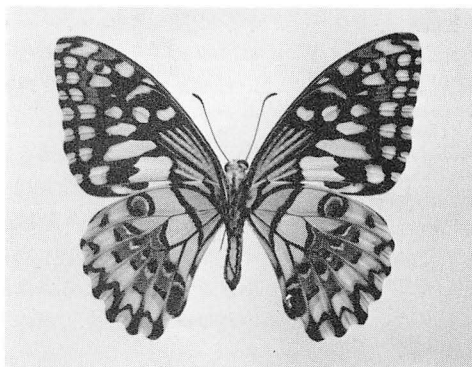


写真4 オナシアゲハ(裏面)

Teruo Irie

相生市

台湾の蝶採集記

近 藤 伸 一

1987年9月19日から9月23日にかけて台湾を訪問した。わずか3日間ではあったが埔里付近で蝶を採集し台湾の自然にふれることが出来た。

9月20日 埔里へ

昨夜は空港からバスで台北まで来たが、さんざんホテルを捜し、夜遅くたどり着いた。夜中に何度も目が覚めて結局寝過し、台北駅へかけつけると予定していた列車は満席、埔里行きのバス停を見つけるのに1時間もかかり、7時発のバスに飛び乗ったのが発車1分前というきわどき、我ながらこの無計画な旅行に少々不安であった。

バスは埔里の街に入った。レンガの壁をむき出しにした建物が目を引く。隣の席で親しくなった青年は新聞紙に「我要下車了、但願有机会再見面、在此祝你旅途平安愉快、再見！」と書き残し先ほど下車した。

午前11時埔里に到着した。乗客が降りるのを一番うしろの席で待っていると入口付近の席にいた背の高い男が日本語で「どこに泊るの？」とやって来た。長崎のNさんという方で、仕事で台北に来たため親類の家へ遊びに来たとのこと、彼は私がバスに乗った時から日本人と分っていたそうだ。「宿はまだ決めていない」「じゃあ捜してあげる」という訳で並んで歩き始めた。バスターミナルの付近は車と人でにぎやか。車がすぐ横に停止して、赤シャツの男が車から身をのり出し声をかけて来た。N氏とは顔見知りのように、この車に乗りこむ。小さなホテルの前でとまり、N氏はホテルの中に入って行った。値段の交渉をしている様子である。「1泊350元だけど、もっと安い所を捜そうか?」と言いながらホテルから出て来た。1元が約5円だから1750円、台北では昨日1900元もした、もちろんこのホテルに決める。赤シャツの運転手に、N氏を送った後の運転をたのみ、ホテルに入った。廊下も階段もミシミシ音のする古い建物で、案内された部室も古い。一応風呂は付いている。小さな窓から見えるのは屋根ばかり、ベッドの上に巻いたフンをひな人形のように立てているのがおもしろい。

南山溪

赤シャツ氏がもどって来た。2人で屋台のタンメンで昼食。埔里の街を出て川沿いの道を車は東へ走り、南山溪のバス停を北に折れ、小さな橋の前で停止した。

住民以外立入禁止という内容の立札が立っていた。赤シャツ氏は立札を指さしニタリと笑い、そのまま発車民家の立ち並ぶ坂道をしばらく走ると更に道は細くなり、民家のとぎれた所で再び停止。ここが有名な南山溪のようだ。広い谷が北へ伸び、川の兩岸の斜面に畑が点在し、左岸の白い道が谷を登っている。想像していたより谷は広く明るい。



写真1 南山溪

時計を見ると午後1時、2時間後に落ち合う約束をして別れ、山道を歩き出したが、蝶の影はみえない。道の下に畑があり川でアヒルが泳いでいる。しばらく進むと川におりる小道があり、この道に入っすぐ白い蝶が目に入った。ウラナミシロチョウか？ 小道の両側は耕作地の跡で、雑草とかん木が生い茂っている。突然セミが大声で鳴き始めた。足元からウラナミシジミが飛び出し、目の前をボロボロのリウキュウムラサキがピョンピョンと往復する。キチョウがウメモドキに似た背の低い木の葉に産卵を繰り返している。この植物がマメ科植物とは思えない。(写真2) 木橋を渡るとトマト畑があり、溜池の上をショウジョウトンボとシオカラトンボに似たトンボが飛びまわっている。小さなシジミがチラチラし、網を振る。図鑑で見たカクモンシジミが、ネットの中をあるきまわっていた。

今にも降りそうな空模様、小道をひき返すがセミの声は無く先程のリウキュウムラサキだけが、目の前をウロチョロしていた。

テラーに乗った農民とすれ違い、若者のバイクが

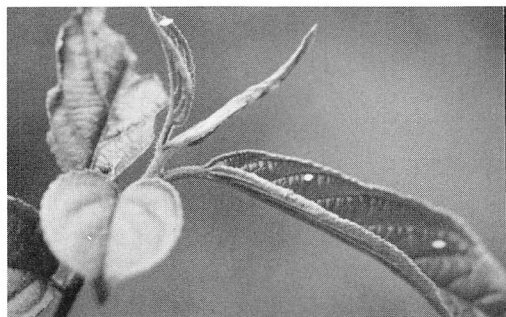


写真2 キチョウが産卵した植物

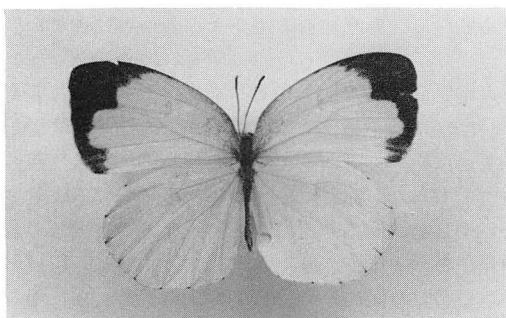


写真3 産卵したキチョウ



写真4 ヒメアカタテハ



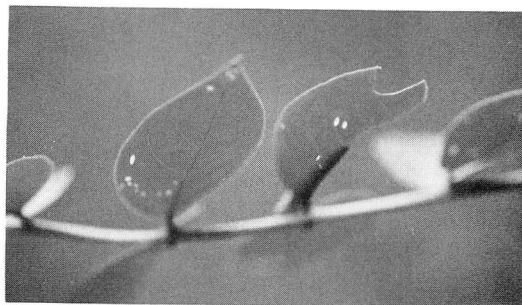
写真5 ヒメアカタテハが産卵したキク科植物

大きなボリュームで音楽をならしながら通り過ぎてしまうと山道は、また静寂にもどった。2頭のヒメアカタテハが産卵している。砂地に這うキク科植物(写真5)の乾燥に強そうな厚い葉に、緑の卵が産み付けられていた。道路に流れ出る水に無数の蝶が吸水している。近づくとワッと飛び立った。キチョウの類はゆるやかに舞い、シジミの仲間はブンブンと音を立てるかのような勢いだ。そろりと網を振る。ネットの中でおり重なるように歩きまわっているのは、黒いシジミがヒメウラナミ、青いシジミはカクモン、ホシボシキチョウも3頭あわてふためいている。この水たまりの社交場にはタイワンツバメシジミとタイワンクロボシシジミ、一段と青くりっぱなホリシャルリシジミも出席していた。鮮かな橙色のメスシロキチョウが舞いおりてきて、吸水する前に網の中に入る。三角紙にひと通り納めてやっと平静さをとり戻し、しばらくこの集団をながめる。黄色い蝶はすべてホシボシキチョウと思っていたが、少し違うのもある。また網を振り、チョウを舞い上がらせてしまう。キチョウ、エサキチョウが餌食となる。

山道をゆっくりと登る。ウラナミシロチョウの幼虫がハブソウを丸坊主になっている。(写真6) 卵もよく目立つ。(写真7) セセリの巢も多いが幼虫で、種を確認することが出来ず、適当にカメラにおさめる。ポッポ



写真6 ウラナミシロチョウ幼虫

写真7 ハブソウに産みつけられた
ウラナミシロチョウの卵

ッと台湾ウラナミジャノメが飛び出す程度で、蝶の数は少ない。カメラをさげたカップルが山道をおりて来た。英語で話しかけてくる。台湾に来て幾度もうけた質問「どこから来たのか?」「1人で来たのか」「なににに来たのか?」「これからどこへ行くのか?」英語が苦手な私にも、分かるようにゆっくりと。彼らは写真を撮りに来たそうだが、今日は気温が低いから蝶はいないとのこと。別れて歩き出すと「Good luck!」という声。ふり返えると手を振っている。山側は手入れを全くしていないコーヒー畑、雨がパラパラと落ちて来た。急に風景もさみしくなり、なぜかコーヒーの木を写真に撮りUターン。例の水たまりには相変わらず蝶のかたまりがワンワンと群れていた。道が木に被われ、暗くなるとコヒトツメジャノメが林から飛び出して来る。

両側に畑が開け、部落が近づいた。みなれたツマグロキチョウが、ここそこと飛び回っている。この国でも、本種は人里でしか住めないようだ。赤シャツ氏が車から顔を出し、大声で「蝶いたか」「あまあ」と私。車のまわりでチラチラするヤマトシジミが印象的であった。

埔里付近で

埔里に帰る道中で、川向うには畑が見え、橋がかかっている。ちょうどレストランの駐車場があり車をとめてもらい、畑に向う。四国の吉野川に似て大きな岩の間を澄んだ水が流れる眉溪に吊り橋がかかり、歩くと揺れる。畑は道で規則正しく区切られ、ナスとつる植物が植わっている。各ブロックごとにつながれた犬が律儀に進入者の番をしていた。蝶の姿は全くなく、早々に引き返えすと、赤シャツ氏が中年の男と話し込んでいる。よく見ると建物は、レストランではないようで、道路に沿って林のような庭がある。中年の男は建物のオーナーで、流暢な日本語を話す。彼は昭和4年生れ、日本語教育をうけたそう。8月まで庭を蝶の観察用に開放しているとのこと。庭に入らせていただく。林の中は小川が流れ、ルリ色に輝くカワトンボが岩に小枝にとまっている。遊歩道が網目状にあり、所々にテーブルやイスも設けられている。永く手入れをしていないのか、道に木が倒れ、一面落葉と雑草に覆われていた。

ヒメジャノメが早く低く跳ぶ。目の前を横切ろうとする青いタイマイが運よくネットに入った。初めて見る台湾タイマイで、翅は破損しているが、透き通るブルーに見とれる。この林にはクロコノマチョウとウスイロコノマチョウの2種がいた。暗い木陰をクロコノマが、明るい空間をウスイロコノマが飛ぶ。一度

時間をかけて観察したい林である。駐車場で台湾モンシロを採集した。モンシロチョウのようにどこにでも飛んでいると思っていたが、旅行中再び姿を見ることが出来なかった。

埔里の町に入り、屋台の並ぶ狭い路地で赤シャツ氏と屋台に入った。半透明の肉まんが大鍋の中にブカブカ浮いている。お椀に1つすくい、ハサミで十文字の切り口を入れ、上にドロリとした白い液をかけて出来上り。ハシで食べる。甘くうまい。屋台の主は太った初老の男で、もの静かに話す。彼も日本の教育をうけ昭和17年小学校を卒業したそう。「最近、私のように日本の教育をうけた者は、じゃまで、もう仕事をしなくてもよいという風潮が強い。同世代の人は仕事をやめている。もう社会の用がないのかも知れない」彼はポツリポツリと語る。急に明るい声で「2年ほど前に宮城県の青年が食べに来てくれた」と話題を変えた。

時刻は17時を過ぎていたので本日の採集を終了し、木生昆虫館へ行ったが、有名な割には印象に残らない所であった。赤シャツ氏は40才ぐらいで、十分ではないが日本語が話せ、白タクで観光地を案内して回るのが仕事ようで、度々みやげ物屋に寄り、店員と話し込むのには閉口したが、気のよい男で、宿に帰り車の料金を聞くと急に照れ、私に料金をきめてくれと言いつつ始末であった。

日は暮れて屋台の裸電球が活々として来る。屋台で

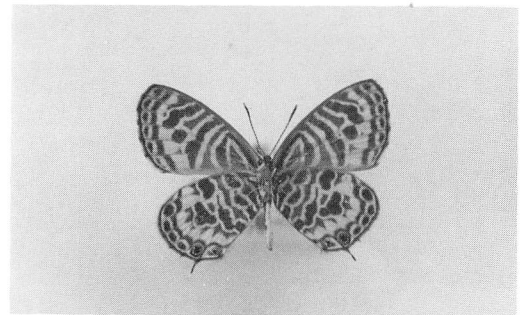


写真8 カクモンシジミ

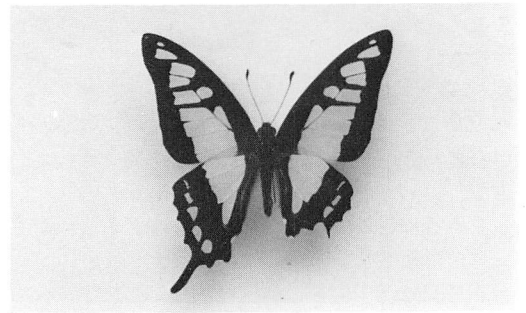


写真9 タイワンタイマイ

ビールとラーメンの夕食をすませ町を散歩する。マレーグマやジャコウネコの檻が店の前にあったり、鳩だけを売る店、蛇専門店等大変楽しい。宿に帰ると今朝バスで会ったNさんが迎えに来てくれ、Nさんの親戚宅を訪問した。2人のお婆さんと夫婦と少年が歓迎してくれた。少年が国語の教科書を読んでもくれた。お婆さんのうちの1人が通訳で、ウーロン茶と甘すぎるジュース、大粒で少しすっぱいブドウ、特性チマキ等を御馳走になり、Nさんに宿まで送っていただく。台湾は車が右側通行なので運転がむづかしいとのこと。昨夜からの疲れでフロに入る気力もなく、早々にダウン。

9月21日 翠峯へ

5時半に目がさめる。翠峯に行くためバスの時刻を調べに出かける。市場でマンゴーを買う。2つ18元。小銭が3元不足していたため借金。宿に帰り昨夜みやげに頂いたチマキとマンゴーをリックにつめ7時のバスに乗った。運転手の横にレジがあり、お金を払うと運転手が店員のごとくチンと鳴らしている。バスは学生で満員。工業専門学校前で茶色の制服たちが下車すると、バスは急に静かになる。眉溪の左岸を走り、昨日の吊り橋を7時25分通過、谷は狭くなり、やがて人家が見え出し南山溪に停止。さらに進むと急な坂道、どんどんと登りつめ7時51分霧社に着いた。昭和5年抗日運動のため山地民族約900人が犠牲となった霧社事件の舞台だ。軍服を着た青年がビニール袋に入った牛乳(?)と、ストローを持って乗り込んできた。彼の朝食だろう。55分に出発し、又坂道を登る。右に碧湖の水面が光っている。この付近は木が少なく、マツとトウヒが目につく程度。8時、山腹は一面茶畑に変わり、15分標高1700mの立札の農場を通過して30分松崗着。この付近は2000mを越えているはずだ。オオベニモンアゲハが飛んでいる。バスは林の中の道を更に登り、急に視界が開けた。窓から手の届きそうな所をアケボノアゲハが飛んでいる。8時45分終点の翠峯に到着した。

ここは観光地のようで、大駐車場に観光バスが何台も並んでいる。売店でコーヒーを飲み、帰りのバスの時刻を確認、12時20分発がある。採集しながら道を下ると松崗でこのバスに乗れそう。カシの写真を撮っていると「May I help you?」台北市の林さんという方で、夫婦でバス旅行の途中である。「どこから来た」に始まる質問のあと玉山をバックに記念撮影(玉山はあの新高山で標高3952m。全然見えなかった)彼は台北に着いたら電話をするよう幾度も念をおし、無理矢理缶ジュースを持たせてくれた。



写真10 標高1700m 牧場



写真11 翠峯、松崗間の道

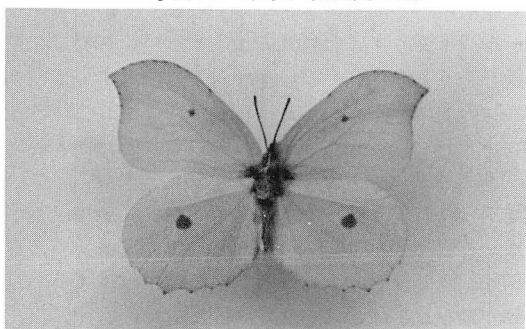


写真12 コヤマキチョウ

彼らと別れ一路松崗を目ざして歩き出す。林の中からフタオチョウが飛び出しブーメランのように元の林へ消える。つい見とれてしまいネットも振れなかった。道はほこりっぽく、車も多い。オオベニモンアゲハが吹き上げられて次から次へと飛んで来る。セリ科の白い粟粒のような花で吸蜜しヒラヒラと飛び去って行く。少し時期が晚かったのか完品は少い。地を這うように飛ぶ黄色い影にピンと来て全力疾走、ネットの中にはコヤマキチョウが入っていた。土砂採取跡か雑草の繁る広場でリックを降ろしピーティング。小さなカマキリと青いハムシしか収穫はない。キク科の花にタイワンアサギマダラが3頭ぶら下っている。ネットを立てた目印を残し、カメラをとりて走ったが戻ってみると

影も形もない。先に採集をしておくべきであったと後悔。

ナシの集荷場で大勢の人が働いていた。奥に果樹園が広がっている。果樹園に入れてほしいとたのむが言葉は全く通じない。身ぶり手ぶりで内容が解ったのか快く了解してくれた。果樹園は二十世紀と書いたナシ園で、ナシの木の下にキャベツが植っている。あちこち歩き、オナシアゲハを一頭見ただけで引きあげた。集荷場に戻るとお婆さんが両手いっぱいナシを抱え持って帰れと言っているらしい。咽がカラカラだったので、御厚意に甘え、2個はおぼる。私には謝謝、再見しか言葉がなかった。

学生が道路の測量をしていた。図面の記号も日本と同じ、拡幅工事の測量とか、学生の1人がすぐ下の民家の裏にチョウがいるが1人だと淋しく、2人で行くとOKとのこと、意味がよく分らないのでパス。上空をアケボノアゲハが青空をバックに真赤な翅がゆっくりとすべるように通過して行った。台湾大学の農業試験場の前でアケボノアゲハを採集する。ボロだが初めての蝶、三角紙に収める。

松崗のバス停に到着した。山の人と一目で分る老婆と女の子がベンチでバスを待っている。老人は塩化ビニールパイプで作った尺八のような水パイプでブクブク音を立ててタバコを吸いながら、席をすすめてくれた。女の子は車の音がする度に道に飛び出し、バスかどうかを高い声で老人に報告している。キャラメルをあげると可愛いい声で謝々。目の前をアケボノアゲハが通過したので今度は私が道に飛び出す。無事にネットインしたアケボノアゲハはピカピカの完品。バスが時刻通り来て彼女らと乗り込む。この付近はすっかり開発が進み昆虫の数は少ないようだ。

バスは茶畑を通過し湖を右に左に見ながら霧社に着き一時停車。工事に積み上げた砂の上にマダラチョウがフワリととまる。バスを飛び降り採集して初めて見事なアカボシゴマダラ♀と分る。

再び南山溪

13時30分南山溪でバスを下車、もうなじみの立入禁止の立札を横目に橋を渡る。子供達が集って来た。子供はどこでも元気がよい。この騒ぎに初老の男が現れる。彼は蝶に詳しく色々アドバイスをしてくれた。今は時期が早い。西宮のYさんという方が6年続けて当地へ来られたとか。ちょうどバイクで通らなかった男をとめ、途中まで彼のバイクに乗って行くよう勧めた。

男の背につかまり、昨日の道を走る。しばらくしてバイクは停止「誰も知らないポイントを教えてあげる」

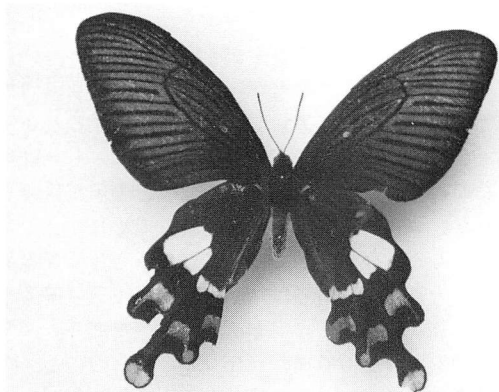


写真13 オオベニモンアゲハ

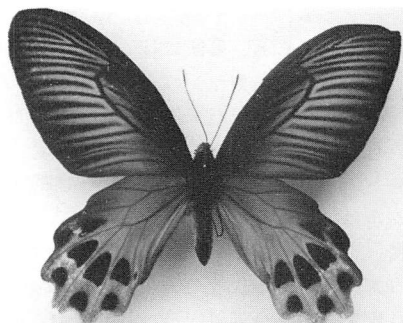


写真14 アケボノアゲハ



写真15 山地管制区の立札(松崗)

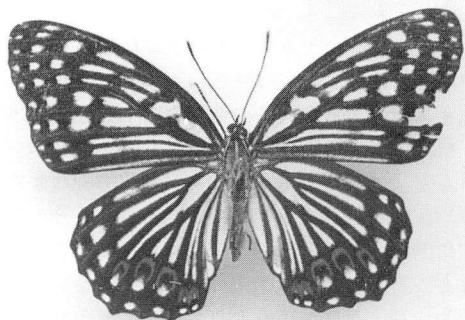


写真16 アカボシゴマダラ(霧社)

と彼はブッシュをかき分け谷におりて行く。蛇もこわいが遅れないように後に続いた。急な斜面を降り美しい谷に出る。川巾は約5m、転石のすき間を透明な水が豊かに流れている。すぐに黒いアゲハが現れ網を振る。後翅の赤いワタナベアゲハだ。左岸の黒い岩に水がしみ出し、数頭のカラスアゲハとキチョウの類、そして多数のシジミが吸水している。この岩は先日無数のアゲハで真黒になっていたとのこと。親切な彼は残念そうである。私はもっと残念な顔をしていたに違いない。彼は崖を登り帰って行った。すぐに緑色をテカテカさせてルリモンアゲハが吸水の仲間に加わって来た。欲深い私は一網打尽を狙い、岩に近ずいたが、アゲハは意外に敏感でホイホイと飛び立ち射程距離に入る頃にはキチョウとシジミが残っているだけ、岩の付近を黒いアゲハがヒラヒラと舞っている。そろそろと引き下り、身を伏せてチャンスを待つ。ベニモンアゲハが目の前を通過、一頭のキミスジがうるさいほど目の前を往復するが、忍の一字でアゲハが大量に岩にとまるのを待つ。目をつけていたルリモンが何度も近づきたまらず網を振り、何度かの空振りの末無事ネットイン。かなりボロボロだが嬉しい。これを機に効率の悪い採集が始まる。近づく、飛び立つ、ネットを振り回す、チョウは飛び散る、待つ、集まって来る、散らす。

マンゴーとちまきの昼食、マンゴーの皮を岩に並べて様子を見たが、チョウは来ない。結局1時間ほどこの谷にいたがカラスアゲハ、ホリシャミスジと追加した程度で元の道へ引き返した。多数いたシジミはすべてヒメウラナシジミで、キチョウ類とともに1頭も三角紙に入っていなかった。

昨日の水たまりには、やはりシジミとキチョウ類が群れていた。今日はルリシジミ類が混り、ルリばかり選んで採集、タッパンルリ、ホリシャルリ、タイワンルリ、ルリと4種も得ることができた。

道は登りとなり、昨日引き返したコーヒーの木を過ぎると畑になり作業小屋で働く人が見える。また山道となりしばらく進むが特に蝶の姿はなく、林からポツポツと飛び出すジャノメ類を採集しながら引き返した。

パスを待っていると酒の匂いをさせた青年が隣にすわり込み、話しかけて来た。「日本の海軍は今どうか」「○戦は？」頭の中は戦争のことで満杯の様子。さきほど蝶の情報を聞かせてくれた男が来て、青年に「まだ何を夢見ているのか」と叱りながら並んですわり、パスが来るまで続編を聞かしてくれた。

この谷は6月から7月が最高で、アカボシゴマダラも普通にいたりとか、キシタアゲハの採集記録もあるそ

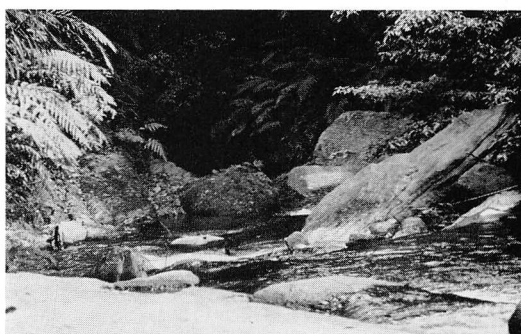


写真17 南山溪、溪流

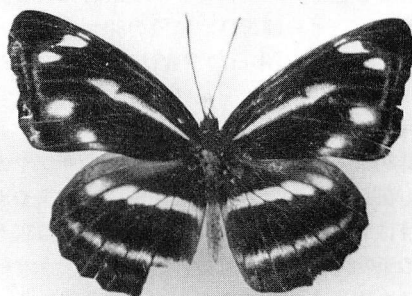


写真18 ホリシャミスジ(南山溪)



写真19 吸水するキチョウ類(南山溪)

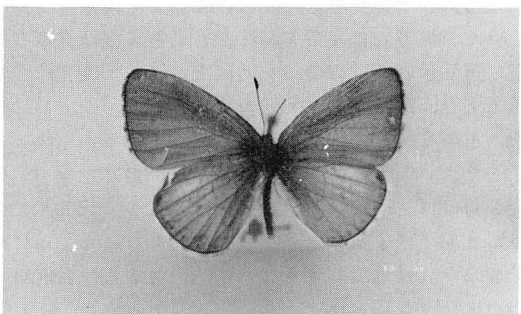


写真20 タッパンルリシジミ(南山溪)

うだ。埔里でヒメギフチョウが採集された噂もあるがこれはあやしいとのこと。彼は神戸のポートアイランドに來られたことがあり、日本に知人も多いそうで、蝶に大変くわしい人であった。

埔里の街

バスの終点が乗車した場所と違い適当に歩き出したため、道にまよい、宿まで1時間も街の中をウロウロした。おかげで町の様子はすっかりわかった。祭の最中か町角には飾りがあり、若い男女がバドミントンに興じている。道は人とオートバイで大にぎわい。4人乗りで走るオートバイも幾度か目撃した。

宿に着くとさすがに疲れているのがわかる。すぐに風呂に入り、例によって屋台でビールとビーフンの夕食。濃珈琲とカンパンに書いた喫茶店に入る。客は一人も無くコーヒーは苦い。値段の80元に驚く。客のいないはずである。(本日の夕食は60元であった。)

9月22日

6時起床、町を散歩、今日も晴、アカシヤの並木は黄色い花をつけている。寺院が多い。旅館やホテルもよく目につく。山葉と書いたオートバイの店もある。昨日の果物屋で3元を返し、トマトのような柿を買う。店主は今度来る時は泊めてあげるから電話を下さいと言い、名刺に電話番号を黒々と書き込んでくれた。

屋台で焼きそばの朝食。10元、味と値段に例によって感激した。ランドセルの小学生がビニール袋にヤキソバを入れてもらい学校に行く。ヤキソバの弁当は人気があるようだ。

宿で荷物をまとめて台北行きのバス停に行く。8時のバスでNさんとおち合う予定。痩せた運転手が私の持っていた竿を見たのか蝶のいっばいいる所を知っているの車に乗れとさかんに勧める。場所は仁愛郷、午後2時の台北行きバスに間に合う。1200元で行くからと彼は熱心である。今日は台北郊外付近での採集を考えていたが予定を変更することにした。Nさんが彼の親類の人の車で到着した。私の弁当まで用意してくれていた。Nさんに事情を話したところ、彼は見事な口調で運転手と値段の交渉を始めた。彼は1000元に値切ろうとし、運転手は1200元をゆづらない。あまりに熱のいった交渉に、大勢の運転手仲間が何事かと集まって来たが、Nさんは益々強気である。台北行きバスの発車時刻は目前で両者の間に割って入り、1200元で乗ることを了解すると、運転手は顔をくしゃくしゃにして喜んだ。残念でたまらない様子のNさんを台北行きのバスに押し込んだ。

仁愛郷へ



写真21 埔里の街



写真22 埔里の街 (オリの中はマレーグマ)

車は畑の中を北に向い、林を通過して小さな村でとまった。駐在所があり、入山許可書の申請を行ったが若いお巡りさんは全く言葉が通じない。パスポートを見て結局わからなかったのか、運転手に質問し、適当に書き込んだ入山許可書を交付してくれた。どうも埔里市民になったらしい。また山道を走り、料金所のゲートの前で再び停止、ここから先は有料の森林公園で惠菓林業森林遊楽区ともいい、キャンプ場や林業試験場の有種関連の施設もある。料金所の職員は、私の姿をみて、建物の中から紙袋を持って来てくれた。夜飛んで来た虫だということで中をのぞくと見事なテナガコネと小さなクワガタが入っていた。大喜びで頂戴し、ゲートをくぐる。林は明るく、途中コーヒー園や小さな小屋が林の中にポツリポツリとある程度で人影も少ない。

タイワンスギの植林地を過ぎると雄大な峡谷に出た。山は垂直に切りとられ、崖の木々を水面に映した緑色の水が谷底をゆったりと流れている。幾度か橋を渡って、道が谷底まで高度を下げた所で運転手は車を停めた。崖から流れ落ちた水が道にたまっている。無数のアゲハが吸水にきている筈であったが、ヒメウラナシジミの見なれた姿だけ。環境は抜群なので採集場所と きめ、道端にこしかけて2人で弁当を分けて昼食とした。

弁当を食べている間にも、メスシロキチョウやウスムラサキシロチョウが通り過ぎた。運転手と別れ、谷に降りる小道に入つてすぐにコノハチョウが飛び出し木々の中に消えた。速い。草の穂にホソチョウがぶら下っている。網をかぶせるまで動かない。リュウキュウミスジがスイスイ飛びまわっている。クロタテハモドキが飛び込んで来る。台湾ウラナミジャノメが草の中から次々と飛び出して来る。パタパタ音を立てて地面に孤を描く大きなセセリがいる。あわてて不事着したのか、もっとあわてていた私は、このチョウさえ取り逃した。ホソバセセリがいる。神戸で見なれたこの蝶が台湾にもいることを知らなかった。

車道に戻るとヒメシロチョウに似た白い影が崖に沿ってチラチラしている。クロテンシロチョウだろう。空しく見送っていると、高い枝にシジミがいる。竿をつなぎ幾度かの空振りを繰り返し、やっとのことで採集したのは派手な衣装のウラフチベニシジミであった。

今日は天候も良いのにハゲハの数は少ない。時期が悪かったのだろう。吸水しているシジミは、圧倒的にヒメウラナミが多く、次いでアマミウラナミ、台湾クロボシの順で、南山溪にあればどいたカクモンシジミは見られない。台湾ツバメシジミとヒメウラボシシジミが小さな白い翅をふるわせて、吸水の仲間に加わっていた。

目を皿にして道を往復していると、クロテンシロチョウやウラフチベニシジミも結構姿を見せる。あつという間に約束の時間となり、車の中で暇を持て余していた運転手の車に乗り、後ろ髪を引かれる思いでこの地を後にした。ツマベニチョウが2頭もつれているのが見え、一瞬の間に視界の後に消えた。

せっかくの機会だったので公園の管理事務所に立ち寄り、職員に育種場の説明を受け、台湾に1本しかないという貴重な木に案内してもらった。水杉という名札がついている樹高20m程度のメタセコイヤであった。

埋里に帰る道中、荒れた畑の前で停車し、雑草の中に入ってみた。キマダラルリツバメの仲間が、なんとすぐ目の前にとまっている。アタフタと車に戻り、ネットを持って再度畑に飛び込んだが、不覚にも元の間所がわからず、結局ヨタヨタと飛び立ったホソチョウを採集して車は発車、台湾での採集をすべて終了した。



写真23 惠蓀林場遊樂區案内板



写真24 仁愛郷の溪流



写真25 吸水するヒメウラナミシジミ

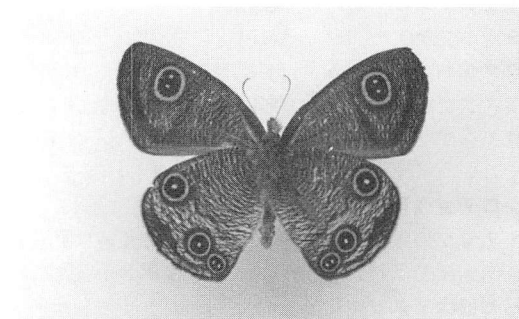


写真26 タイワンウラナミジャノメ

おわりに

台北のバスターミナルに着いた時、日はとつぷりと暮れ、土砂降りの雨、この雨の中を翠峯で初めて会った林さんが両手にみやげを抱えて来てくれた。最近の台湾の社会情勢、大陸との関係、物価の話等、夜遅くまで語り合った。翌朝彼は、私が飛行場に出発した後ホテルまで見送りに来てくれたそうである。

初めて台湾に行き、一端ではあったが自然にふれ、蝶も採集することが出来た。我々日本人が無理矢理忘れ去ろうとしている戦争の後遺症が、今なお色濃く残っていることを、再認識した。

〈採集記録〉

- 1 採集場所は次の通り省略して記載した。

南山溪…南 埔里周辺…埔 松崗…松

翠峯…翠 霧社…霧 仁愛郷…仁

- 2 採集年月日は、1987年9月を省略し日のみ()で記載した。

- 4 個体数はあくまで主観的なものであるが、目安として次の記号で表示した。

十…少ない 十…少なからず #…多い

- 5 新鮮度についても同様の趣旨で次の記号で表示した。

a…新鮮 b…中間 c…汚損

アゲハチョウ科

全般的に少なく、発生時期の盛はすでに終わっていた。ただ高地でのアケボノアゲハ、オオベニモンアゲハはやや晩い程度で個体数は多い。11種採集、目撃した。

アケボノアゲハ	松(21)2♀	++b
オオベニモンアゲハ	翠(21)6♂2♀	#c
アオスジアゲハ	仁(22)1♂1♀	+b
タイワンタイマイ	埔(20)1♂	+c
オナシアゲハ	松(21)1ex 目撃	+
モンキアゲハ	南(20)1♂(21)1♂ 埔(20)2♂ 仁(22)1♂#b	
タイワンモンキアゲハ	埔(20)1♂	+c
ワタナベアゲハ	南(21)1♂	+c
クロアゲハ	南(20)♂埔(20)2♂	++b
カラスアゲハ	南(21)2♂仁(22)1♂	+c
ルリモンアゲハ	南(21)1♂仁(22)1♂	+c

シロチョウ科

キチョウの仲間は高地を除くと、ごく普通に見られた。南山溪では特にホシボシキチョウが多かった。

その他はメスシロキチョウ、ウスムラサキシロチョウ以外は時期が晩いようで、個体数は少い。12種採集

目撃した。

ホシボシキチョウ	南(20)5♂1♀(21)2♂3♀#a	
ツマグロキチョウ	南(20)2♂(21)2♂	++a 夏秋両型
ウスイロキチョウ	仁(22)1♂	++b
キチョウ	南(20)2♂1♀(21)3♂	#b
エサキキチョウ	南(20)3♂(21)♂松(21)♂	++b
タイワンコヤマキチョウ	翠(21)2♂	+b
メスシロキチョウ	南(20)3♂(21)3♂仁(22)3♂++b	
ウラナミシロチョウ	南(20)1♀(21)♀	+c
ツマベニチョウ	仁(22)2ex 目撃	+
ウスムラサキシロチョウ	南(20)3♂仁(22)2♂#	++a
タイワンモンシロチョウ	埔(20)♂	+b
クロテンシロチョウ	仁(22)5♂	++b

マダラチョウ科

最も意外だったのはこの科の少なかったことである。3種を採集した。ただ種名は特定出来なかったがリュウキュウアサギマダラに似たものは数度見かけた。

スジグロカバマダラ	南(21)2♀	+c
アサギマダラ	仁(22)♀	+c
タイワンアサギマダラ	松(21)♂	+b

ジャノメチョウ科

タイワンウラナミジャノメは限られた場所によく見かけた。他の種については、全般的に時期が晩かったようで、7種採集した。

タイワンウラナミジャノメ	南(20)4♂(21)3♂仁(22)2♂3♀++a	
ミヤマシロオビヒカゲ	翠(21)♂	+b
コヒトツメジャノメ	南(20)2♂(21)3♂仁(22)1♂1♀++b	
ヒメジャノメ	埔(20)2♂2♀	++b
ウスイコノマチョウ	埔(20)2♂2♀	++c 夏型
クロコノマチョウ	埔(20)2♂2♀	++c 夏型
ルリモンジャノメ	南(21)1♂1♀仁(22)1♂	++c

タテハチョウ科

キミスジが各地で見られた程度で、やはり時期が晩かったようである。翠峯で見たフタオチョウは、ヒメフタオかどうか特定出来なかった。14種を採集、目撃

キミスジ	南(21)2♂埔(20)1♂仁(22)2♂	++b
ヒメアカタテハ	南(20)1♀	+b
ルリタテハ	南(20)1♂	+c
ツマグロヒョウモン	仁(22)1♂	+b
コノハチョウ	仁(22)1ex 目撃	+
リュウキュウムラサキ	南(20)1♂目撃	+c
クロタテハモドキ	仁(22)2♂	+b
リュウキュウミスジ	埔(20)1♀仁(22)1♂	++b

タイワンミスジ	翠 ⁽²⁾ 1 ♀ 仁 ⁽²⁾ 1 ♂	+b
ホリシャミスジ	南 ⁽²⁾ 1 ♂	+b
シロミスジ	南 ⁽²⁾ 1 ♀	+c
イシガケチョウ	仁 ⁽²⁾ 1 ♂	+c
アカボシゴマダラ	霧 ⁽²⁾ 1 ♀	+b
ホソチョウ	埔 ⁽²⁾ 1 ♀ 仁 ⁽²⁾ 1 ♀	+b

テングチョウ科

テングチョウ	南 ⁽²⁾ 2 ♂	+c
--------	----------------------	----

シジミチョウ科

カクモンシジミが最盛期、ヒメウラナミシジミとともに個体数の多さに驚かされた。他の種は時期が晚かった。14種採集。

ウラフチベニシジミ	仁 ⁽²⁾ 3 ♂ 3 ♀	++b
ヒメウラナミシジミ	南 ⁽²⁾ 8 ♂ 仁 ⁽²⁾ 7 ♂	#a
アマミウラナミシジミ	南 ⁽²⁾ 1 ♀ 仁 ⁽²⁾ 6 ♂	++b
ウラナミシジミ	南 ⁽²⁾ 1 ♀	+b
シロウラナミシジミ	南 ⁽²⁾ 1 ♀ 仁 ⁽²⁾ 1 ♂	+c
ヤマトシジミ	南 ⁽²⁾ 3 ♂ ⁽²⁾ 1 ♀ 仁 ⁽²⁾ 1 ♀	++a
カクモンシジミ	南 ⁽²⁾ 8 ♂ 1 ♀ ⁽²⁾ 2 ♂	#a
タイワンクロボシシジミ	南 ⁽²⁾ 1 ♂ 仁 ⁽²⁾ 3 ♂	++b
タイワンツバメシジミ	南 ⁽²⁾ 2 ♂ 仁 ⁽²⁾ 2 ♂	+a
タッパンルリシジミ	南 ⁽²⁾ 1 ♂	+c
ホリシャルリシジミ	南 ⁽²⁾ 5 ♂	++b
ルリシジミ	南 ⁽²⁾ 1 ♂	+c
タイワンルリシジミ	南 ⁽²⁾ 3 ♂	+b
ヒメウラボシシジミ	仁 ⁽²⁾ 3 ♂	+b

セセリチョウ科

明らかに時期が晚く、各地で幼虫が見られた。わずかに4種を採集したのみ。

タイワンキマダラセセリ	仁 ⁽²⁾ 1 ♂	+b
ホソバセセリ	仁 ⁽²⁾ 2 ♂	++a
ウスバキマダラセセリ	仁 ⁽²⁾ 1 ♂	+b
コモンチャバネセセリ	南 ⁽²⁾ 1 ♂	+b

〈参考文献〉

白水 隆 (1960) 原色台湾蝶類大図鑑 保育社
 福田晴夫 (1976) チョウの生態観察法 ニューサイエンス社

Shinichi Kondo 神戸市

早春に生野町で採集した蝶

入 江 照 夫

1985年3月24日、春まだ浅い南但馬での採卵会の記録を報告する。

3月例会の採卵を朝来郡生野町黒川で参加会員数6名で行った。

午前中は銀山湖の北岸、青垣町へ向う山道で採卵を行った。目標のブナは見当らなかったが、サクラが多く卵数は少なかったがメスアカミドリシジミはかなり広い範囲で確認された。

午後はフジミドリシジミを求めて黒川ダムの西方へと移動した。ブナが適当にあり余り広くない範囲で採卵を開始した。フジミドリシジミが主体であったが採集成果は6名で次の通りであった。

1. 採 集 卵

フジミドリシジミ	58卵
メスアカミドリシジミ	33卵
ジョウザンミドリシジミ	2卵
ウラクロミドリシジミ	12卵

2. 採集幼虫

コムラサキ	2頭
ヒメキマダラヒカゲ	2頭
ミスジチョウ	1頭

3. 目撃成虫

日当りのよい山道などで越冬した成虫が目撃された。

テングチョウ
ヒオドシチョウ
キタテハ
ルリタテハ
キチョウ

この時のフジミドリシジミは孵化率が悪く約50%であった。筆者の採卵数11卵のうち6卵が孵化、成虫になった。

Teruo Irie

相生市

宮古島の蝶

入江 照 夫

1 はじめに

仕事の都合で宮古島へ何度か出張した。大阪から空路1300軒2時間で沖縄、さらに330軒1時間で南西諸島の宮古群島、宮古島は沖縄と台湾との中間に位置する。

あまりなじみが無く台風シーズンに時おり耳にする程度であり、¹台風銀座の宮古島、のイメージでしか記憶のない島である。1984年6月から1987年4月までに数回の出張のうち何度か蝶の採集が出来た。

宮古島は緯度で西表島より北、台北より南であり、高い山が無く地形は平で、琉球石灰岩におおわれ市街地の平良市を除いて、ほとんどがサトウキビ畑で収穫前のサトウキビの穂が汐風に吹かれ見渡すかぎりに銀波をうつさまは壮大である。

2 蝶相について

4月、6月、7月、11月、12月とほぼ年間を通じて採集した事になるが個体数に変化はあるものの、周年同じ種類をみる事が出来る。採集地域は島の西部下崎地区と中央部にある平良市営亜熱帯植物園とで、自然林と草地が少ない事もあり種類はあまり多くないが、ある種のある時期には異常と思える程に多くの個体数を見る事が出来た。

ツマベニチョウ、ハマヤマトシジミ、ベニモンアゲハ等がそれで、何故か11月に数多く採集している。

3 各種の記録

2回目の訪島であった1984年11月10日から12月5日までに採集したもののみを取りまとめて報告したい。

アゲハチョウ科 6種

ジャコウアゲハ
ベニモンアゲハ
アオスジアゲハ
ナガサキアゲハ
クロアゲハ
シロオビアゲハ

シロチョウ科 5種

ツマベニチョウ
モンシロチョウ

キチョウ

ウラナミシロチョウ

ナミエシロチョウ

マダラチョウ科 5種

アサギマダラ
リュウキュウアサギマダラ
カバマダラ
スジグロカバマダラ
オオゴマダラ

タテハチョウ科 11種

アカタテハ
ヒメアカタテハ
ルリタテハ
タテハモドキ
アオタテハモドキ
メスアカムラサキ
リュウキュウムラサキ
ヤエヤマムラサキ
ツماغロヒョウモン
イシガケチョウ
リュウキュウミスジ

ジャノメチョウ科 2種

ウスイロコノマチョウ
リュウキュウヒメジャノメ

シジミチョウ科 7種

ヤマトシジミ
ハマヤマトシジミ
ウラナミシジミ
オジロシジミ
ルリウラナミシジミ
アマミウラナミシジミ
タイワンクロボシシジミ

セセリチョウ科 5種

クロボシセセリ
ユウレイセセリ
ヒメイチモンジセセリ

クロセセリ

オオシロモンセセリ

以上の7科、41種類である。

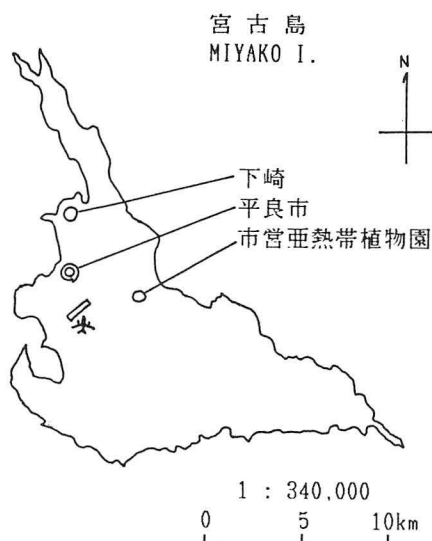


図 1

Teruo Irie

相生市

青垣町でエゾスジグロシロ

チョウを採集

広 畑 政 己

1987年4月29日に氷上郡青垣町稲土の奥の林道にて本種を採集しているので報告する。

県下では神戸市、宝塚市、川西など摂津地方と播磨地方では記録がかなり見られるが、北部では但馬地方で数ヶ所が発見されているだけで、丹波ではこれまでに記録がなくこれが初記録と思われる。

林道には本種の他にスジグロシロチョウも生息しており、当日採集した4♂の内1♂が本種であった。同定に当っては発香鱗と発香裏の大きさの比率を用いて行った。

Masami Hirohata

姫路市

幹に産付されたクロシジミの卵

広畑政己・近藤伸一・永幡嘉之

蛭川(1985)によると本種の産卵植物はアブラムシやキジラミが寄生する各種の草本、木本植物で、その数は15科21種にも及ぶようで、他には小石にまで産卵したことが確認されている。また、産付位置は小枝や葉の表面裏面に産みつけることが多いという報告がある。

1988年7月31日に三木市大村にて写真1のように直径約15cmのコナラの幹に産付されている卵を発見した。幹に産卵するという例は珍しいと思われる。

産卵された卵は71卵で産卵位置は地上約2mの高さであった。コナラの生えている場所は林の中の少し日がさし込む程度の暗いところで、コナラにはひこばえもなく、当然樹上の葉にはアブラムシがいるかどうか不明である。

蛭川(1985)では産卵行動を誘発する主要因はアブラムシやキジラミの存在よりもクロオオアリの存在を上げている。この場合もクロオオアリが樹液にきていたのでそれに誘発されてそのまわりに卵を産付したものと思われる。

この他に同地でナラガシワの小枝にも20数卵産卵が確認できたので報告をしておきたい。

〈参考文献〉

蛭川憲男(1985) クロシジミ 文一総合出版 東京



写真1 幹に産付されたクロシジミの卵

オオウラギンヒョウモンの飼育と観察

八 木 弘

蝶友、近藤氏より2枚の枯れ葉に生み付けられたオオウラギンヒョウモンの卵を13卵戴き飼育を試みた、その観察の知見を記してみます。

☆越冬準備

食草のスマレ1株を植えた素焼き鉢(土は少なく)上部は3程程空にしておき、稲わら、枯れ草、等を短かく切って鉢の上部を覆う、越冬幼虫の保温の為、卵を此の中に入れ鉢は、2程程地上に出し土中に埋める。

針金を、鉢の内径に合せ半円型を作り、十文字に組み「ドーム」を造りストッキングを掛ける。

鉢を土中に埋めたのは、保温と乾燥を防ぎ、春先き食草のスマレの芽だしをよくする目的で、特に幼虫に対する配慮ではなかった。

屋内での越冬は暖か過ぎて冬眠を妨げて好い結果を得られないと思う。(過保護)

12月下旬 13卵無事孵化している事を確認する。

新しい年を迎えた4月中旬食草のスマレは既に4-5枚の新芽を出しているが、食痕は見られず、不安を感じる、下旬になり漸く僅かな食痕を見るも、幼虫の姿は見られず。5月中旬体長15-20mmに成長した幼虫2頭を見い出す。後を丹念に調べると、後の幼虫は総べて体長6-7mmのものばかりである。

最初に「サナギ」に成ったのは、6月3日である、その時点で最少の幼虫は7-8mm程度であった。その後の過程は次の通りである。

- | | | | |
|-----|-----------|-----|----|
| 1 群 | 6月3日-5日 | サナギ | 2頭 |
| 2 群 | 6月14日-15日 | サナギ | 3頭 |
| 3 群 | 6月24日-25日 | サナギ | 3頭 |
| 4 群 | 7月3日-6日 | サナギ | 3頭 |

☆羽化は次の通り

- | | | |
|-----|-----------|-------|
| 1 群 | 6月17日-18日 | 2♂ |
| 2 群 | 6月27日-28日 | 3♂ |
| 3 群 | 7月7日-8日 | 2♂ 1♀ |
| 4 群 | 7月14日-16日 | 1♂ 2♀ |

☆飼育、観察の結果から

飼育頭数が少ないので上記のデーターで判断するには過ちもあると思うが、大方の傾向は示されているものとして、知見を述べてみます。

年末に孵化した幼虫は、春となり食草の芽立ちを待つて一勢に食餌するものと思っていたが、実はそれぞれの幼虫に、プログラムが組込まれそのプログラムにしたがい、生育していく様である。上表の如く「4つのグループ」に分かれ約10日間隔で生育している。

「サナギ」は約2週間で羽化し成虫となる。

上記の通り、1群と2群は総べて♂ばかりである。3群は「♂2」「♀1」4群は「♂1」「♀2」の結果である。

以上から見る限り、♀蝶は遅れて発生する様であるが各群毎に♀蝶が交じっていてもと思われるが此の点は飼育頭数を増やせば、自ら答えが出るであろう。

幼虫は、食餌の時以外は、食草を離れ身を潜めるため2-3齢幼虫で、その姿を見付ける事は、困難であった。

体長20mm程度に成った頃より別の鉢植えの食草に移し各群毎に飼育した。一度に多く飼育すると固体が小さく成る傾向がある。13卵中、成虫となったのは11頭である、2頭は幼虫で行方不明となる。

以上取り留めもない拙文となりましたが、何かの参考に成れば幸いです。

Hiroshi Yagi

相生市

夏の石垣島で採集した蝶

広 畑 政 己

1988年8月9日の半日と10日の1日間石垣島で蝶を採集する機会に恵まれた。何しろ1日半という強行軍のため、パンナ岳を中心に、川平、登野城、吉原など南西部の地域で南国の蝶とその環境に触れてきただけという印象の強い採集行であった。従って新しい記録や知見など何も得られない状態ではあったが、採集と目撃記録だけでも書き留めておきたい。

アゲハチョウ科

1 シロオビアゲハ

パンナ岳 10-VIII-1988 1♂ 吉原 10-VIII-1988 1♂2♀

2. ベニモンアゲハ

パンナ岳 9-VIII-1988 1♂ 吉原 10-VIII-1988 2♀

3. クロアゲハ

吉原 10-VIII-1988 1♂1♀ パンナ岳 9-VIII-1988 1♀

4. ジャコウアゲハ
バンナ岳 9-VIII-1988 1♂
5. アオスジアゲハ
バンナ岳 9-VIII-1988 1♀
6. ミカドアゲハ
バンナ岳 10-VIII-1988 1♂
7. カラスアゲハ
バンナ岳 9-VIII-1988 5♂♀ 吉原 10-VIII-1988 2♂

シロチョウ科

1. キチョウ
バンナ岳 9-VIII-1988 2♂1♀ 名蔵 10-VIII-1988 1♂1♀
2. タイワンキチョウ
バンナ岳 9-VIII-1988 2♂2♀
3. ナミエシロチョウ
バンナ岳 9-VIII-1988 5♂1♀ 登野城 10-VIII-1988 2♂
4. ウスキシロチョウ
バンナ岳 10-VIII-1988 5♂
5. ツマベニチョウ
吉原 10-VIII-1988 5♂ バンナ岳 9-VIII-1988 2♂(目)

タテハチョウ科

1. イシガケチョウ
バンナ岳 9-VIII-1988 2♂ 名蔵 10-VIII-1988 1♂
2. ヤエヤマイチモンジ
バンナ岳 10-VIII-1988 1♂ 川平 10-VIII-1988 1♀
3. リュウキュウミスジ
バンナ岳 9-VIII-1988 5♂2♀ 登野城 10-VIII-1988 2♂
4. リュウキュウムラサキ
バンナ岳 10-VIII-1988 1♂ 登野城 10-VIII-1988 1♀
5. メスアカムラサキ
バンナ岳 10-VIII-1988 1♂1♀
6. タテハモドキ
バンナ岳 9-VIII-1988 2♂ 登野城 10-VIII-1988 1♂
吉原 10-VIII-1988 1♂ 名蔵 10-VIII-1988 1♀
7. アオタテハモドキ
名蔵 10-VIII-1988 1♂ 吉原 10-VIII-1988 1♂
8. コノハチョウ
バンナ岳 10-VIII-1988 1頭目撃

シジミチョウ科

1. ムラサキシジミ
バンナ岳 10-VIII-1988 1♀

2. アマミウラナミシジミ
バンナ岳 9-VIII-1988 1♂
3. オジロシジミ
バンナ岳 9-VIII-1988 3♂2♀ 名蔵 10-VIII-1988 1♂1♀
4. タイワンクロボシシジミ
バンナ岳 9-VIII-1988 2♂ 名蔵 10-VIII-1988 2♂2♀
5. ウラナミシジミ
バンナ岳 9-VIII-1988 1♂ 名蔵 10-VIII-1988 1♂
6. ヤマトシジミ
登野城 10-VIII-1988 2♂1♀
7. ハマヤマトシジミ
登野城 10-VIII-1988 6♂2♀

マダラチョウ科

1. オオゴマダラ
バンナ岳 9-VIII-1988 2♂ 川平 10-VIII-1988 1♂1♀
2. スジグロカバマダラ
バンナ岳 9-VIII-1988 3♂2♀ 川平 10-VIII-1988 3♂1♀
3. リュウキュウアサギマダラ
バンナ岳 9-VIII-1988 3♂ 川平 10-VIII-1988 3♂1♀
登野城 10-VIII-1988 2♂

ジャノメチョウ科

1. マサキウラナミジャノメ
バンナ岳 10-VIII-1988 3♂

セセリチョウ科

1. アオバセセリ
バンナ岳 9-VIII-1988 2♀
2. コウトウシロシタセセリ
バンナ岳 10-VIII-1988 2♂
3. ネットタイアカセセリ
バンナ岳 10-VIII-1988 2♂1♀
4. クロボシセセリ
バンナ岳 10-VIII-1988 2♂1♀
5. ユウレイセセリ
バンナ岳 9-VIII-1988 3♂2♀
6. チャバネセセリ
バンナ岳 9-VIII-1988 2♂

Masami Hirohata

〒671-22 姫路市

サンゴ礁に囲まれた南の島・採集記

苦 木 隆 幸

年中蝶の舞う、亜熱帯の島々、八重山、私が蝶採集を趣味の一つに加えてから、最も行きたいと思っていた採集地であった。頭の中のイメージとして遠い南国会社勤務の身では容易に行けるチャンスが得られないと考えていたが、思い切って一度チャレンジしてみると以外に近づく。朝大阪空港を飛び立てば昼過ぎには石垣空港に着き、その日の午後から採集が堪能できる身近な感じを持ってから、2年の間に4回ハイビスカスの歓迎を味わうことができました。

それは、4月中旬の石垣島 4日間

10月初旬の石垣島及び西表島の 4日間

6月下旬の石垣島及び西表島の 4日間

5月中旬の石垣島及び竹富島の 3日間

であります。

合同の採集記はそのうちの3回目と4回目を思いのままに綴ってみたい。

3回目の採集行

メインはカンピラの滝とその道中を探訪したい。

採集種の目標は、1) リュウキュウウラボシ

2) タイワンキマダラ

3) イワカワシジミの幼虫

1987年6月24日

梅雨明けの太陽が容赦なく照り付け暑いこと真夏並みである。石垣空港13:00着の飛行機であるから、夕方までたっぷり時間はある。パンナ岳へ車を走らせてスミナガミをねらう。

バンナスカイラインの展望台を過ぎ北側斜面の下り途中で環境のよさそうなところを発見し、腰をおちつけて飛来して来るのを待つことにした。

次々と10分間隔ぐらいでやって来て葉の先端に止まるので簡単にネットインすることができた。

☆成果 スミナガシ 7頭

翌日、9時 石垣港発 西表島船浦港行きのジェット船に乗り込む。あいにく風が強く、欠航するのではないかと心配したが、台風以外では欠航しないと聞いて、ひと安心。ルンルン気分に乗っていると、途中まで走ったところで波が高いので船浦港の入口を通過するのが、困難だからだめ。大原港に行先を変更する

旨伝達があり簡単に行先変更である。

私にしてみれば、到着港が南と北ではおお違いで予定は大幅に修正せざるを得なかったが、島の人々は何も言わずに、OKである。

のんびりとした南国の土地柄に接し、長寿の秘訣を教えられたようで、思わず苦笑。しかし現実には笑ってばかりではいられない。予定より約30kmも遠い港に着くので大変である。西表島へ行けないよりは、良しと考えあきらめることにした。

カンピラの滝の下流の浦内川の河口についたら、浦内川を上る定期船は出るが、帰りの船は午後2時発で終り（シーズンオフのため）。別便を仕立ててもらわないと帰れないと言う。秘境とは不便なところに価値があると納得をして、カンピラの滝へ……。

ボートで20分程上流に上ったところに自然岩で出来た船着場がある。そこから滝までの細い自然道の部分、部分に採集のポイントがある。約40分程の道のりではあるが、蝶の姿はほとんど見られなかった

滝の近くに細い沢が本流に流れ込んでいる処があり、繁った木の葉から夏の日がもれ、昼なお暗い樹々の間を幻想的に浮び上がらせる。そんな時、遠くにハエが飛びかうように舞っている、リュウキュウウラボシシジミを発見、次々にネットイン。苦勞の多い採集となったが目的達成である。

☆成果 リュウキュウウラボシシジミ 4頭
タイワンアサギマダラ

帰りの道中に月ヶ浜へ タイワンキマダラのポイントである。小さい範囲内であるがポイント内の小道を何回も往復し、林の中から道に出て来たのをゆっくりとネットイン。

☆成果 タイワンキマダラ 20頭

翌朝。クチナシの木を求めて歩いたが西表島にはクチナシは少なく、やっと見つけた木は実に大穴があいていて時すでに遅く、イワカワシジミは、お目にかかることなく第3回目の八重山の旅は終る。

第4回目の採集行は、突然3日間の仕事の空間が出来た。即出発である。思えばアサヒナキマダラセセリの活動の時期と合致するではないか。

アサヒナキマダラの調査に焦点を定め1988年5月18日機上の人となる。

南の島は梅雨の最中で晴れの確率は少ないが、行ってみないとチャンスは得られない。

4回目ともなると不安などどこにもない、石垣島の地形の1つ1つが計画の中に適確に浮上して来る。

民宿に到着すると3人の蝶屋さんの先陣がいた。様子を聞くとアサヒナキマダラの発生は少なく、しかも天気の悪い日が続くので、興味が薄らぎ、もっぱら迷蝶を追っかけているとのことであった。直近の情報は得られず翌朝を待つ。

朝の天気はぱっとしないが初志貫徹。下界は薄日がさしているが梅雨期独特の雰囲気。どんよりとし、目ざすオモト岳は雲の中。「よし」と言う気になれない不満な天候である。

車でオモト岳の登山口へ、車を下りるとショボショボと雨が降っているが、下界は薄日がさしている。標高525mの山頂へアタック開始。

昼なお暗い登山道を1人もくもくと歩く、暗く夜明けの山道のように気持ちの良いものではないが、私には目標がある。この気持ちが何もいない70分の道程りを勇気づけてくれる。

ガスに包まれた山頂へ到着。食草のリュウキュウ竹が無造作に風にゆれているのが印象的である。

視界200m 霧雨まじりのコンディション。山頂にあるNHKの鉄塔のそばでリックを背に休んでいると、アサギマダラが風に乗って2頭、3頭と流れて行く。待つこと1時間、11時頃霧をはらって薄日がさす。アサヒナの姿などどこにもない。探し求めて頂上を動きまわっていると、東斜面の空間に日だまりのようになってアカタテハが羽を休めている良いポイントに遭遇した。周囲1面リュウキュウ竹の林である。すべての条件が整っていないことはない!!待つこと久しである。

一寸した晴れ間にどこからともなく現われては飛び去るアサヒナキマダラセセりに面会することができた。目標達成である。

☆調査 アサヒナキマダラセセリ 数頭

翌20日には、民宿に同宿した蝶友と竹富島へ。しめった梅雨の太陽が容赦なく照り付ける防風林の道の道をネットを肩にあてもなくさまよう。スジグロ

カバマダラが、何百、何千頭と発生し、ネットを振る気にもならない。そんな中にスケカバとか言うのが1つ2つと混入している。魅力ある蝶でもないがと思いつながらネットイン。村落の垣根の草花には、シロオビアゲハが、まさるともおとらず、へばりついている。何んと蝶の多い島かと感心するばかりである。

そんな中に迷蝶が混入していてラッキーにもネットイン。一途に迷蝶を追っている人には何んだか悪い感じもしたがラッキーとはこんなものかと……。暑い5月の旅は大成果のうちに終る。

☆成果 スケカバ (スジグロカバマダラの翅のすけたもの) 2頭
コウトウマダラ 1頭

次は、いつ、何を。と思いをはせながら……必ず又行くことを誓って報告を終わります。

Takayuki Nigaki 姫路市

ウスイロヒヨウモンモドキの多産例

近 藤 伸 一

岡山県新見市草間台地で採集したウスイロヒヨウモンモドキが、1986年6月23日から7月6日にかけて9卵塊1,842卵を産卵した。母蝶は6月22日採集したもので、プラスチック製の水槽に水さしのオミナエシを入れ、日のあたらない窓際で飼育した。6月中は砂糖水を、7月からはカルピスを1日1回母蝶に与えた。最初に産卵された卵は約2週間後に黒点があらわれ、翌日には変色し、その後一部は孵化したが、ほとんどは卵から脱出出来ずに死亡し、孵化した幼虫も葉に食いつくことなく死亡した。残りの卵もほぼ同様の経過をたどった。

産卵の経過			
6月23日	180卵	6月29日	196卵
24日	241卵	30日	151卵
25日	278卵	7月2日	173卵
27日	294卵	6日	176卵
28日	153卵	11日	母蝶死亡

総産卵数 1,842卵
Shinichi Kondo 神戸市

播磨蝶友会会員名簿

ルリシジミがエビヅルに産卵

近 藤 伸 一

日高町神鍋スキー場において、1987年8月9日ルリシジミがエビヅル（ブドウ科）の蕾に産卵しているのを確認した。過去にノブドウ（ブドウ科）にも産卵例はあるが、食餌植物となるのかどうかは確認されていない。

なおエビヅルの蕾は持ち帰ったが、私の不注意によりカビを生やし幼虫の飼育まで到らなかった。

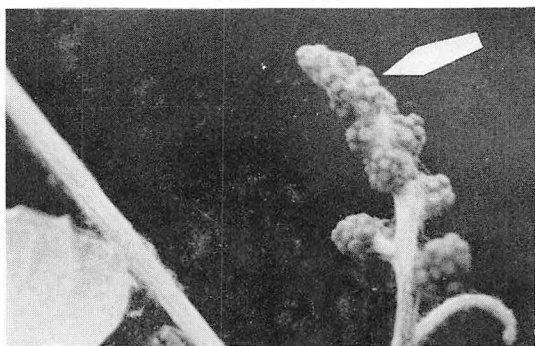


写真 エビヅルの蕾に産みつけられた
ルリシジミの卵

〈参考文献〉

福田晴夫ほか（1984）原色日本蝶類生態図鑑Ⅲ
（保育社）

Shinichi Kondo 神戸市

編 集 後 記

前回「ヒロオビ」No.7を発行してから5年も経過してしまいました。時の流れの速さに驚くばかりです。

No.8は離島特集にすべく計画を進めて来ましたが、本会の最大の長所である気楽さが裏目に出て、離島の記事はやや少なくなったようです。

会員の多くは職場が変り、公私とも多忙をきわめ、全員の揃うことはなかなか困難な状況となりました。

このあたりで一旦会誌の発行を休止し、会員相互の親睦を増々深め、全員で楽しく蝶とつき合って行きたいと思います。

ひろおび（播磨蝶友会会誌） No.8

発行者／播磨蝶友会

〒678 相生市

佐々木薫方

発行年月日／1989年7月10日

編集者／広畑政己・近藤伸一

印刷所／株式会社リプロ相生事業所

相生市相生5292

ひろおび No.8 (1989)

も く じ

兵庫県産蝶類分布資料(5)・ギフチョウ・ウス バシロチョウ	広畑 政己・近藤 伸一	1
県下に於ける蝶数種の産卵に関する記録	広畑 政己	8
ウラナミジャノメの幼虫をメリケンカルカヤ から発見	近藤 伸一	9
広島県東部と岡山県のベニモンカラスシジミ の採集地報告	佐々木 薫	10
春季に於けるモンシロチョウ属2種の生態	広畑 政己・近藤 伸一	11
兵庫県の蝶雑記 (2)	広畑 政己	14
ギフチョウの累代飼育について	八木 弘	15
南西諸島の迷蝶2種	入江 照夫	17
台湾の蝶採集記	近藤 伸一	18
早春に生野町で採集した蝶	入江 照夫	27
宮古島の蝶	入江 照夫	28
青垣町でエゾスジグロシロチョウを採集	広畑 政己	29
幹に産付されたクロシジミの卵	広畑 政己・近藤 伸一・永畑 嘉之	29
オオウラギンヒョウモンの飼育と観察	八木 弘	30
夏の石垣島で採集した蝶	広畑 政己	30
サング礁に囲まれた南の島・採集記	苦木 隆幸	32
ウスイロヒョウモンモドキの多産例	近藤 伸一	33
ルリシジミがエビヅルに産卵	近藤 伸一	34
会員名簿		34